
彼女と恋と勉強方法

ナル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と恋と勉強方法

【NZコード】

N8457X

【作者名】

ナル

【あらすじ】

山多摩高校に通う成績優秀な生徒、赤久奈乃香はその日学校に置き忘れてしまった本を取るために放課後の学校に向かう。そして軽いノリで図書室に向かった。そこには山多摩高校で一番成績が悪い生徒、雲取亘くもとりわたるが勉強していた。あまりの勉強の効率の悪さに痺れを切らした赤久奈は「私が勉強教えてあげる」と言ってしまう。从此から赤久奈と雲取の合同勉強、そしてその他の生徒たちをも巻き込んだ青春が始まった……。

プロローグ　『全ての始まり』 三人称視点

「人生って簡単ね」

少し豪華な雰囲気を漂わせる部屋の一室で長い黒髪の少女　赤久奈乃香は呟いた。

赤久奈の右手には少ししわくちゃになってしまったテストの解答用紙が握られている。どれも高得点だ。

今日は5月20日。赤久奈が通う山多摩高校では第一回定期考查が終了して一週間が経った日だ。高校の掲示板には定期考查の順位が張り出されている。

結果は一番ではなかつたにしろ赤久奈の順位は上から数えたほうが早かつた。

「はあ、勉強ってつまらないわねー」

赤久奈は溜息を吐き出しながら天井を見上げた。この場合の『つまらない』は「テストが面倒臭い」という意味ではなく「テストが簡単すぎる」という意味である。

赤久奈は勉強をしたことが無かつた。

赤久奈の頭は要領良く作られているのか、授業で習つたことを忘れるということがなかつた。もつとも、赤久奈からしてみれば「どうして一度聞いたことを忘れるのだろうか?」と思つてゐるだらう。

「まあいいわ。暇だし読書でもしようかしら」

そう呟きながら赤久奈は鞄の中から本を取り出そつとした。そこで「あれ?」と間抜けな声を出していた。

「……本がない」

赤久奈は何かの間違いだろうと思ひながら鞄の中身をひっくり返した。教科書や文房具やらが床に散らばるが、それでも目的の本が出てくることはなかつた。

「はあ……学校に忘れたのかな……？」

赤久奈は頭を搔きながら本の在り処を思い出していた。

「面倒臭いけどまあいいか……」

そう咳きながら赤久奈は部屋着を脱いで制服に着替えた。本来の赤久奈なら本を忘れたとしても「明日でいいか」と言つているところだが、なぜか今日はたまたま本を取りに行こうと思つていた。

「うし」

山多摩高校の制服に着替えた赤久奈は小さく気合を入れてから家を出て行つた。

山多摩高校の制服は素朴なもので、全校生徒が黒い地味なブレザーに身を包んでいる。校舎もその素朴さに合わせているのか、それとも合つてしまつたのか、少し薄汚れている箇所が多く見れる。そんな少し薄汚れた校舎の一年生の下駄箱には赤久奈がいた。

現在時刻は5時。この時間帯に存在する生徒は部活動に励んでいる。そのためか遠くから吹奏楽部のラッパの音が微かに聴こえる。

そして赤久奈は自分が所属する一年C組に辿り着き、自分の席から目的の本を取り出した。

「よし、任務完了」

赤久奈は少し嬉しそうな顔をしながら呟いた。後は来た道を戻るだけだ。

「…………ん？」

いや帰ろう、と思つたときに赤久奈はつい窓の外を眺めた。山多摩学園の校舎の作りは上から見ると『口』の字に見えるため、窓から外を眺めると向こう側の校舎を見ることが出来る。ちょうど赤久奈が所属する一年C組の校舎の向こう側は図書室となっている。別にそのこと自体は赤久奈も知つてはいるからたいした問題ではないだが、

「誰かいる？」

赤久奈は眼を凝らしながら図書室を見た。やはりそこには赤久奈が思つたとおり誰かがいるようだつた。光の反射とかそういう都合のため『誰かがいる』としか認識できずそれが男子生徒なのかそれとも女子生徒なのかまでは確認することが出来ない。

「いんな時間に珍しい……」

赤久奈は図書室にいる誰かに向かつて小さく呟いた。

赤久奈の言つとおり、図書室に人がいるといつゝとは極めて珍しいことだった。

この山多摩高校の図書室は名前の割には置いてある本が非常に少ない。その本の数は隣にある資料室のほうが多いのではないかと思わせるぐらいの少なさだった。

そのため大抵の生徒はこの図書室ではなく高校のすぐ近くに設けられた図書館を利用するものが多い。

「ふうん……」

赤久奈は物珍しそうに図書室にいる誰かを見ている。

そしてどういうわけか、赤久奈は来た道を戻らずに図書室に向かつて歩き始めた。

そのときの赤久奈はただ的好奇心から図書室に向かつていた。ただたんに「面白そだから」とか「暇つぶしのために」とかそんな軽いノリで図書室に向かつっていた。

それが後々に、その図書館にいる誰かに恋することも露知らずに……。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

放課後の図書室で俺こと雲取亘（くもとりわたる）は夕日に顔を照らしながら一人寂しく勉強しているのは言つまでもない。

別に俺だってわざわざ勉強したくて居残っているわけではない。

これには深い理由がある。

それは単純明快、俺が馬鹿だからだ。

俺が通う山多摩高校ではついこの間第一回定期考查が行われた。そのときに俺は迂闊にも試験範囲を間違えてしまい万全な状態で試験に挑むことが出来なかつた。

その結果、高校内でも最下位という必然的ではあるが不名誉な汚名を授かってしまい、教師陣からは問題扱い。そして俺が所属する一年C組の担任の教師である長尾丸先生からは「成績が悪いから図書室で補修」と言われてしまう始末だ。

「次からは試験範囲を間違えないようにしないとな、剣呑剣呑」

ちなみに俺は勉強するときは雰囲気とか何と無くとかそういうた
单纯な理由で伊達眼鏡を着用している。学園生活を過ごす際に伊達
眼鏡は俺の体の一部と化している。いわば皮膚だね、うん。

俺は気楽にもそう考えながらペンを回した。本気を出せば満点を
取れる俺だからこそ余裕を持つて勉強に勤しみができるのだ。
そしてペンを止めて参考用紙の問題の答えを書いた。

「えっと……太陽系で一番高い山はエベレストっと
「違うわよ、オリンポス山よ」

俺が「コレが一番の答えだ！」と自信満々に言える解答を書いて
いると、急にその解答を否定してくる言葉が聞こえてきた。

声がしたほうを振り向いてみると、そこには綺麗な黒髪を持つ女性が立っていた。

「オリンポス山はエベレストの三倍もの高さがあるのよ。地球で一番高いのはエベレストで合っているけど太陽系が含まれるならオリンポスよ」

女性は説明しながら俺の席の前に歩いて座つていった。俺は「は、はあ」と呟くことしかできなかつた。

「…………」
「何やつてんの？ 早く解きなせこよ」
「え？ あ、うん……」

俺が女性を眺めていると、なぜか逆ギレしながら俺のことをキッと睨んできた。俺は慌てて数学の参考書を取り出して勉強し始めた。先ほどまでは地理を勉強していたのだが、実を言うと地理は結構得意で定期考査では赤点を取らなかつたのだ。

「…………」
「…………」

今の俺の状態を言葉で表すなら『氣まずい』で事足りるだろ。う。そう思われるほど俺は気まずさを感じていた。勉強に励もうと頭の中では意志を固めても田の前にいる女性が何者なのかに気を囚われてしまい公式が全然思い出せない。そして数字がゲシュタルト崩壊してきた。ゲシュタルト崩壊といえば『6』と『9』という数字は間際らしくて仕方がないと思つ。中学生の頃はどうちがどつちだったか判らなくなつて困つたときがあつた。

「……ねえ、集中してんの？」

「うん、今は『6』と『9』の違いについて追求してくるといいんだよ。あともう少しで答えが導き出せやつだ」

「……この問題の回答は『6』なぜ『9』ではなく『6』なのかな？」「

うん、それは知った。なので俺はこの問題の解答に『24』と書いた。

「はい間違つてこるわよ

そんな馬鹿な。

「この問題の公式を使って解くのよ」

田の前にいる女性は俺の教科書を開いてとある公式を指差した。
なるほど、この公式を使つのか。

「で、どうやって使つの？」

「……代入するのよ」

田の前にいる女性は半ば呆れながら説明してくれた。そのおかげで俺はこの問題の答えを無事に解くことが出来た。

「ありがとう、助かったよ
「どういたしまして」

俺が感謝の言葉を出すると、女性はやはり呆れながら返事をした。
はて、そういうばどつして呆れているのだろうか。これを話題に聞いてみよう。

「どうして呆れてるの？」

「貴方のあまりにも酷すぎる低脳な頭に呆れているのよ」

それは実に単純明快な答えであつて单刀直入な解答であり残忍残酷な返事だった。この女性はなかなかどうしてこんな悪魔みたいなことが言えるのだろうか恐ろしい。

「まあどんだけ馬鹿にされていようが助けてもらつたことには感謝するよ。えっと……赤久奈（あかぐな）さん」

俺が田の前にいる女性、もとい赤久奈さんにお礼を言つた。すると赤久奈さんは少し驚いた顔をしてきた。

「な、なんで私の名前を知つているのよ……？」

「その台詞を言い放つてことは少し誤解しているようだね。俺は赤久奈さんの名前“しか”知らないよ。赤久奈さんがどういった人間でどういった人物なのかは何も知らないよ」

「……なるほどね。それでも私の名前を知つてている理由にはならないわね。どうして知つているの？」

「それはクラスメイトだからだよ」

俺が言つと、赤久奈さんは少し目を見開きながら考え始めた。そして思い出したかのように「あつ！」と大きな声を出した。図書室では静かにして欲しい。

「思い出した！ 貴方確かに同じクラスの雲取亘でしょ！？」

「その口ぶりから察するにどうやら俺のことは覚えていなかつたようだね。あと図書室では静かに」

俺が皮肉を込めた言い方をすると、赤久奈さんは「ごめんごめん」

と謝つてきた。

「えっと……雲取くんはびひしてこんなところで勉強してるの?」

定期試験は終わつたよね?」

「勉強が好きなんだ」

赤久奈さんがまるでお茶を濁すように取り繕つてきたので、俺は適当に嘘をついて誤魔化した。まあ半分ぐらいは本当なので神様仏様も許してくれるだろ?。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

「定期考査が終わつたのにテスト勉強しているだなんてよっぽど勉強が好きなんだね、だけど気持ちは共有できないなー。だつて勉強なんてつまらないでしょ？」

勉強なんてつまらないでしょ？

赤久奈（あかぐな）さんのこの言い方は全国の勉強家で勉強好きな方々にあまりにも失礼な言い方だつた。これは全国の勉強家で勉強好きな方々に罵倒されたり暴力を振るわれても文句は言えないだろう。

ただし俺は罵倒や暴力を浴びる赤久奈さんのことなんてそもそもを言つと見たくない。だからそんな残念な事態になる前に俺がハッキリと「その言葉はあまりにも勉学に励む人々に失礼だ、言い直しを要求しよう。そして全国の勉強好きな人に謝れ！」と叱つてやらなければならぬ、うん。

そして俺は言つた。

「だよねー。勉強なんて本当につまらないよねー。一体何が楽しくて勉強しているんだろうね」

しまつた、つい本音が出てしまつた。

「あれ？　今さつきまで『勉強が好きなんだ』って言つてなかつたつけ？」

赤久奈さんがジト目で俺を睨んできた。

しまつた、墓穴を掘つてしまつた。

俺は頭の中でどうやって誤魔化そうか考え、そして途中で誤魔化

す必要性が無いといつに気付いたため正直に言った。

「半分好きだけど半分嫌いってことだよ。ケースバイケースって」と理解して欲しいな」

「なんで数学の公式は覚えていないくせにそんな言葉は知っているのよ」

「馬鹿にしないで欲しいな。」う見えても中学生の頃は成績が一番だったんだよ」

後ろから数えて一番だけ。

「ところで何時まで勉強してるの?」

「そういう赤久奈さんは何時までこの図書室にいるの?」

「雲取くんが勉強を終えるまで」

「それじゃあ俺は赤久奈さんが帰るまで勉強するよ

「ちよ、それじゃあ私帰れないじゃない!?」

赤久奈さんはなぜか慌てながら叫んできた。大事なことなのでもう一度言つがなぜか慌てながら叫んできた。

はてさて、なんで俺は理不尽にも赤久奈さんに呼ばれる……というより怒られ(?)なければならぬのだろうか?

「赤久奈さんはどうして俺が勉強を終えるまで図書室にいるの?」

「雲取くんと一緒に帰りたいからよ」

「え? なぜに?」

「時計見なさいよ」

俺は赤久奈さんに言われるがままに図書室に備えられている時計を眺めた。時刻は既に『18時30分』となっていた。補習の時間は既に過ぎている。

「じゃあ赤久奈さんは先に帰つててよ。俺は長尾丸先生に報告しないといけないしさ」

「だつたら私も一緒に行くわよ」

「え？ いや悪いよ勉強見てもうつた上に付き合わせるだなんて……それに先に帰つてればいいじゃないか」

「いいわよ、どうせ暇つぶしだし。それに私は雲取くんと一緒に帰りたいのよ」

赤久奈さんはそう言いながら机の上に置いてあつた鍵を取つていった。

「ほら、早くしないと帰りが遅くなるでしょ」

赤久奈さんが鍵に着いているストラップを握りブンブン回しながら俺のことを見た。俺は「ああ、悪いな」と呟きながら図書室を出て行つた。

それにして俺と一緒に帰りたいだなんておかしなことを言つ入だな、と俺は心の中で呟いた。

「長尾丸（ながおまる）先生、図書室の鍵を返しにきました」

俺は職員室に入室して早速長尾丸先生の机に向かつて歩いていつた。

なぜか後ろから赤久奈さんが着いてきているけど気にしたら負けだと思つので放つておいた。

「おー……？ ああ、鍵ね。うん。お疲れ様」

長尾丸先生は癖がついた髪をボリボリと搔きながら鍵を受け取った。

長尾丸先生は見ての通り（文字で書かれているので読者様の皆様には見えないだろうが、あえてこう表現する）いい加減といふか適当な人間で、整理整頓が出来ない人物である。現に長尾丸先生の机の上には子供一人分ぐらいの高さがあると思わせる本のタワーが出来上がっている。

「そりいえば長尾丸先生、どうして図書室に一度も来なかつたのですか？」

俺は長尾丸先生に対してもつともな疑問を尋ねた。長尾丸先生はこんないい加減な人間でも一応は教師。補習中の生徒がキッチリと勉強しているのか見回りに来ていても不思議ではない。むしろその方が普通だ。にも関わらず一度も図書室には訪れなかつた。

「あー……。あ、あー……？　あー……。いや、うん見回りうとしたよ？　だけど勉強の邪魔になると悪いからあえて行かなかつたんだ。先生はお前のことを信じているんだ」

長尾丸先生は天井に目線を移しながら言つた。

わかつた、察するに忘れていたようだこの駄目教師は。

「あれ？　赤久奈。お前どうしてこんな時間帯にここにいるんだ？」

長尾丸先生は俺の背後で立つてゐる赤久奈さんに気がつき、質問していた。

さすがは腐つても教師。一応は生徒の心配はするようだ。それに

しても確かに俺もどうして赤久奈さんが図書室に立ち寄っていたのかは気になつた。本を借りていつたわけでもなかつたし。

「ええっと、雲取くんの勉強に付き添つていました」

赤久奈さんは少し口ごもりながら答えた。まあ嘘ではないからどうでもいいが。

「はあ？ こんなバ……頭が弱りきつた奴の面倒を見ていたのか？ それは」「苦労だ」

後で殴つてやるつかこのクソ教師め！

「いえ、雲取くんはなかなか取り込みが早いですよ。この調子なら学年一位も夢ではありませんよ」

おお、ナイスフォローだ赤久奈さん。でも学年一位は無理だよ

メン。

「ふうん、まあ赤久奈がそう言つんだから半分期待しておくか。それじゃあ早く下校しなさい。親が心配するぞ」

「わかりました長尾丸先生」

俺と赤久奈さんは長尾丸先生に「さよなら」と返事をしてから職員室を出て行つた。そのときにコッソリと「ジジイ教師め……」と俺は呟いたのだが数秒でバレてしまい頭に拳骨を喰らつたことは言つまでもない。

第1話？『出会い』 雲取亘視点

「それじゃ、早く帰りましょ
「…………うん」

俺は赤久奈（あかぐな）さんの後を追いかける形で下駄箱に向かつて行つた。

時刻は既に『19時00分』となつていた。
いくら五月という太陽が図々しく空に居残り続ける時期だらうと月が上がるという事象は変えられない。
つまり何が言いたいのかを簡潔に言つてしまつと辺りは既に真っ暗になり始めているということだ。

「うわー、暗いねー」

俺は少し棒読みになりがちな口調で呟いた。なぜか赤久奈さんは黙つてている。というより無視された感じだ。

「勉強教えてくれた礼もあるし家まで送るよ
「へえ、意外と律儀なのね。まあ送つてもうつためにわざと待つてあげたんだけどね」

赤久奈さんはまるで不思議なものを見るかのような目で眺めてきた。

失礼な、俺だって常識は持つていて。
それにしても赤久奈さんがなんで俺と一緒に帰りたいって言つて

いたのか謎で仕方が無かつたが、今その謎が解けたため俺の頭はスッキリした。要するに期間限定の用心棒ということらしい。

「だけど赤久奈さんの言い草だと送つてもうつじとが前提だったみたいだね」

「あら？ こんな遅くにか弱い女の子一人で帰らせるつもり？」
「か弱い？ それは自分で言つ言葉じやないでしょ。それに数分間しか話してないけど赤久奈さんはどちらかと言うと傲慢な人わかつたごめんなさいもつ一度と言つませんだからそのモップを下ろして」

危なかつた、後もう少しで俺の頭部は下駄箱の横に放置されたモップ（しかもかなり重そうなやつ）によつて潰されてミンチにされていただろう。今日俺は『モップはちゃんと片付けないと命の危険がある』という教訓を覚えた。やつたぜ、無駄な知識が増えたぜ！

「私の家は校門を出て左の道を歩くのよ」

「へえ、奇遇だね。俺の家は校門を出て右の道を歩くんだ」

「そう、それは奇遇ね」

「ああ、奇遇だ」

赤久奈さんは「奇遇奇遇」とまるで馬鹿にするかのように呴きながら。それでいてまるで当然のように校門を出て左の道を歩いていった。

その姿はまるで当然の如く悠然としており、それでいて当然の如く毅然としていた。

俺は一瞬「俺は右の道に行こうかな」と呴きながら「まあ約束してしまったものは仕方がない」と自分に対して呆れながら校門を出て左の道を歩き始めた。

「ヒルダ雲取（くもとり）くん、ちょっと質問してもいいかしら？」

「ええ、良いでしょう。この僕、雲取亘（わたる）は貴方の質問に何でも難なく答えましょう」

「……さつき鞄の中に数学の参考書を入れているときこちらりと見ちゃったんだけど雲取くんの数学の定期考査の点数……その……貴方の出席番号」と同じだったんだけど私の見間違いよね？」

赤久奈さんはまるで申し訳無さそうに、だけど探究心が醸し出している顔で尋ねてきた。

ちなみに俺の出席番号は『17番』だ。

俺はこのとき「何で俺の出席番号知つてんだよそもそも何でテストの点数見てんだよ変態サノバビッチめ！」と自分でも意味不明だと思う罵倒をしようと思ったが、さすがに恩人にそんな失礼なことはいえないので適当に誤魔化すことに決めた。

「見間違い……だと思うよ」

「いや、あれは間違いなく17点だった」

おやまあなんてことじどう。この人は断定してきましたよ。確信犯だね、うん。

「だけど残念なことに17点ではないよ」

「……うん、他人に悪い点数を教えたくない気持ちは分かるけどそ、悪足掻きは止めようよ」

赤久奈さんが俺のことまるで可哀想なものを見る目で見てき始めた。だけど俺の点数が17点ではないことは真実である。なので俺は潔く真実を告げることにした。

「俺の数学の点数は17じゃなくて11だよ。1“1”」

俺は証拠品として鞄の中に入れてある数学の解答用紙を取り出した。右上にはハツキリと『11』と書いてある。

『1』と『7』は時々間違えるよね似ているし。いくら赤久奈さんでも失敗はあるから仕方が無いわ。

俺は赤久奈さんの顔を見てみた。てっきり呆れた顔でもしているのかと思っていたが、どちらかと言つてまるで残念なものを見る田で俺の数学の点数を見つめている。

「ああ、うん……仕方がないよね。むしろ一桁じゃなかつたから良いよね……うん」

赤久奈さんは何か言葉を探すかのような仕草をしながら俺にフォローをしてきた。

……なんでだろ？、なんか胸が凄く痛い。
も、もしかして……これが恋！？

「…………なわけないか

「急に独り言なんて呟いてどうしたの？」

「いや、独り言じゃないよ。故意に聞こえたみたいにしたんだよ。

ほら、早く相槌打つて」

「え？ あ、えっと……そうだね？」

「はいよくできました」

赤久奈さんは「意味が分からない」と言いたげな顔でこちらの様子を伺っている。

俺に伺われても困るよ。俺だって意味わかんないんだから。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

「それじゃあさ、赤久奈（あかぐな）さん、数学の定期考査の点数は何点だったの？」

自分がだけ点数を暴かれるのはなんだか不愉快な気分になる。俺は割りと我儘な人間で他人の事を知りたがる性格だ。

「私？ 私は88点だよ」

赤久奈さんは何の悪びれた様子も無く淡々と答えた。

「マジかよ俺の8倍かよ……」

「んー、最後の問題がどうしても解けなかつたんだよねー。いつもだったら90点は越えるんだけどなー……悔しかつたなー」

赤久奈さんは本当に悔しそうな顔をしながら言つた。だがしかし俺からしてみれば赤点じゃないのがとても羨ましい。

「一体どうやつたら赤点を取らずに済むのかなあ？」

「え？ 何もしなくても80点ぐらい余裕で取れるでしょ？」

きました、本日の上から目線宣言。天才ならではのお言葉です。

「俺はね、赤久奈さんと違つて馬鹿だから赤点しか取れないんだよ……」

「……確かにコレは酷いね。普通に勉強しなくともこんな点数取らないよ普通は」

赤久奈さんは同情の目で俺のことを見てきた。

そ、そんな目で俺を見ないでくれ！ 泣けてくるじゃないか！

「だ、だけどさー、毎日しっかりと勉強していれば報われる日がやつてくるよー、多分！！」

赤久奈さんは何の確証も無いことを自信満々に叫びながら言った。自信満々に言つたにも関わらず『多分』といった確証も無い言葉を使つていて、スルーしておくことに決めた。読者様の皆様もスルーしてあげてくださいな。

「……それにしても報われる、ねえ……」

俺は赤久奈さんに聞こえないように咳き、今度は赤久奈さんに聞こえるように淡々と言つた。

「……俺さ、九九も言えないんだよ

そして赤久奈さんの顔が分かりやすく固まった。

「じょ、冗談よね？」

「いや、本当です」

「……本当に？」

「本当です」

お互にまるで誤魔化すかのように「あつはつは」と笑つた。そして次の瞬間に真顔になつた。いや、真顔にならざるを得なかつたと言つたほうが正しいかも知れない。

「それでは問題を出します」

「望むところだ」

「…… 6×7 は？」

「40」

「…… 2×8 は？」

「19」

「…… $8 + 8$ は？」

「64」

「なんで計算も出来ないのよつー?..」

赤久奈さんが急に怒鳴り始めた。

「で? 全問正解だつた?」

「全問不正解よ! 小学校からやり直せ!..」

……さすがに今の言葉はちよつと傷ついた。

「どうすんのよ明日物理の小テストがあるのにこんななんじゅ〇点に決まつてゐわよ!..」

赤久奈さんが俺にとつては不吉なことを言つてきた。

そう、明日は物理の小テストがあるのだ。

山多摩（やまたま）高校の物理の小テストは計算問題が多く出題されるのだが、俺は計算が出来ないどころか公式すら覚えていないという絶望的な状況に陥っている。

だがしかし、俺はそんなことに備えて今日の放課後の補習中に“ある物”を作つていたのだ。

「ふつふつふ、安心してくれたまえよ赤久奈さん。俺にはコレがある

俺はポケットの中に忍ばせておいた鉛筆を取り出し赤久奈さんに見せた。その鉛筆を見た赤久奈さんは『?』が見えるんじゃないかと思えるぐらい疑問的な顔をしていた。

まあそんな反応をして仕方がないだろ？。普通に見たらどうにでも売つているごく平凡な鉛筆だからね。だがこの鉛筆に隠されたギミックを知った時には驚きの顔をしていることだろ？。

「なにそれ？」

「ここれはただの鉛筆だ。だけどこの側面に数字が書いてあってね」

「

俺は側面に刻まれてある数字を見せようとした。しかし赤久奈さんが急に鉛筆を奪い取った。

「ふんっ！」

「あ、ああああああああ！？」

そして次の瞬間、なぜか赤久奈さんは俺の鉛筆を一瞬の内に真つ一つにしては地面に叩きつけて勢いよく踏み潰した。

ボキンッ！ という鈍くもあり綺麗な音と共に鉛筆は粉々になり、原形を失っていた。

「ど、どうするんだよ赤久奈さん！？ これじゃあ明日の小テストがピンチだぜ！！」

「連で小テストやつても意味ないでしょうー？」

俺は赤久奈さんに対して怒ったのだが、赤久奈さんに正論を言われてしまつたため「うう……」と呻く事しか出来なかつた。

それでもさすがに壊す必要はなかつたと思うのだが……。

「はあ……貴方どうやって入学したの？」

「失礼な。入学した頃まではちゃんと覚えてたよ。その後は……その、とある理由によって物忘れが激しくなったというか……記憶力が悪くなつたといつうか……」

「凄く素晴らしい記憶力を持っているのね」

赤久奈さんの嫌味に俺は再び「ううう」と呻く事しか出来なかつた。

「仕方がないわね、今日は私が勉強を見てあげるわよ」

「はあ……ん？ 今なんて言った？」

「勉強見てあげるわよ」

「え？ どうして？」

俺はいきなり何の脈絡も無いことを言われたため少し戸惑つてしまつた。

「私は馬鹿が嫌いなのよ。同じクラスに馬鹿がいると思つだけでも吐き気がするわ」

俺は汚物扱いですか。

「だから貴方の頭を改善するためにも付き合つてあげるわ。安心しなさい。私が勉強を教えてあげるんだから明日の小テストは満点

よ

「は、はあ……」

赤久奈さんの言葉に俺はやる気無く相槌を打つておいた。

そのとき俺はチラッと赤久奈さんの顔を覗き見したのだが、なぜか生き生きとした、可愛らしい顔をしていた。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

「それじゃあ早く私の家に行きましょ！」

赤久奈（あかぐな）さんはそつ言いながら駆け足になつた。

「…………あれ？」

俺はふと自分でも似合わないと想いながらも少し頭を捻らせ考えた。
「この流れだとまるで…………」

「まるで、赤久奈さんの家で勉強するみたいだね」

と、俺は戯言を言つた。

「？　勿論私ん家（ち）で勉強するに決まつてるじやん？」

そして赤久奈さんはまるで「当然でしょ？」と言つたげな顔をしてきた。

「…………」

俺は三點リーダ四つだけという台詞とも言えない台詞を言つた……つもりだ。そして瞬時に我が身を体育の授業で習つた『回れ右』で一、二、三と回転させた。

「そんじゃ、俺家あっちなんぞ」

赤久奈さんにやう語りかけてから俺は今歩いていた道とは反対方向を歩き始めた。

「何帰らうとしてんのよ！？」

「グヘエツ！？」

俺は赤久奈さんの美しい綺麗な左手によりワイシャツの襟を捕まれ少し首を絞められるという体験を味わう羽目になつた。おかげで「グヘエツ！？」とかいう漫画でしか聞けないであろう奇妙な声を出してしまつた。

「何帰らうとしてんのよ！？」

赤久奈さんは先ほどと同じ質問を一字一句間違えずに言つた。俺はこのときには「あ、凄い記憶力羨ましいなあ」と思つてしまつた。

「いやせ、今日はもう遅いから家に上がるのは悪いよ。それに親御さんも驚くと思うよ」

「それなら大丈夫よ。パパ……両親は共働きで家にいないから」

多分だが今「パパ」と聞こえたような気がする。今日に限つて録音機を用意していなかつたことを俺は自分自身にしばらくの間は恨み続けるだろう。赤久奈さんみたいな冷静キャラが「パパ」とか言うのは以外で少し新鮮だつた。

「両親が家にいなんだつたらなおさら危ないよ。俺ってこう見えても男だから性的な意味で襲うかもしれないよ？」

俺は冗談ではなく真面目に言つた。実際に中学生の頃に仲の良かつた幼馴染の女の子の家に遊びに行つたときに襲つちゃつて朝起き

たらその幼馴染の女の子と一緒に裸でベッドの中に……まあこの話は別の機会にしようか、俺にとつてはあまり愉快な思い出でもないしあまり覚えていないし。

「わ、私はそこまで軽い女じゃないわよ！？」

赤久奈さんは少し顔を赤らめながら叫んだ。まあこれが普通の反応だわな。

「それに私は馬鹿を田の前で放つておくほど飼い主失格じゃないわよ！」

あらり、今度はペット扱いですか俺は。

「でも着替えが……」

「私の貸してあげるわよ」

それはさすがに問題があるよつな……。

「……あれ？ もしかして雲取（くもとり）くんって女の子の家に入ったことが無いの？ もしかして照れてるの？」

「……うん、実は女の子の家に入ったことが無くてね、今でも心臓がバクバクしてるよ」

赤久奈さんがムカつく顔をしながら言つてきたので、俺は丁寧に嘘を吐いた。まあ幼馴染の女の子の家に遊びに行つた出来事はノーカウントにしておこう。本当にあまり愉快な思い出でもないし、あまり覚えていないし。

「それじゃ、今日が初体験になるわね！ デリする？ 今日を逃

したら一生来ないかもしれないよこんなチャンス?」

なんか目的が変わつていいような気がするが、それでも赤久奈さんは俺を自分の家に誘おうとするのことを諦めてはくれないらしい。テンションもウザイぐらい上がってきてる。

ちすがにこじで折れないと男が廃るつてやつだな……。

俺は心の中で呟き、赤久奈さんに向かつて言った。

「わかつたよ。それじゃあお邪魔するよ」

そして赤久奈さんは「パアツ」と効果音が付きそつたほど可憐らしい笑顔を見せた。

「それじゃあ善は急げね! 早く帰りましょ!」

何を急いでいるのか赤久奈さんは急に走り始めた。俺も赤久奈さんの後を追いかける形で走った。

次の日、まあ俺からしてみれば5月21日のだが君たちからしてみれば……明日の出来事だろう。

などと意味の分からぬことを心中で思いながら自分の教室の机でぐつたりと寝ている。他の人から見たらさぞ死体と間違われるんじゃないかと自分で自画自賛してしまつぐらいの死体っぷりだ。嬉しくないけど。

……正直者な俺が正直に答えよう、疲れた。

俺は疲れきつた体をなおも動かさずに死体っぷりを演じた。

「よひ、雲取。おはよ

じゃなくてさようならか、元気に

逝つてこいよ

「死んでねえよ」

今登校してきたのか、俺の横の席でもある友人の本仁田秀樹（ほにたひでき）が挨拶をしてきた……。だがその挨拶の仕方がまるで不吉そのものだったため、俺は「おはよう」という朝で使われるだらう典型的な言葉を使わずに突っ込みを入れた。

本仁田くんは先ほども説明したとおり俺の友人の一人で学力は平均的だ。顔も黒い短髪でさっぱりしたさわやかな顔をしているのだが、やはりどこか平均的な顔をしていた。高校1年からの付き合いで、出会った当初から俺呼んで『平均男』と勝手に命名した。試しに過去に一度だけその名で呼んでみたら、直後に本気右アッパーを喰らったので封印せざるを得なかつたのだがいやや残念な話だ……。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

「そりいえば今日は物理の小テストだな。ちゃんと勉強してきたか？」

本仁田（ほにた）くんがまるで思い出したかのように俺に尋ねてきた。俺は条件反射で「うつー！」と呻き声を漏らしてしまった。

「ははっ、まあ勉強なんか普通しないよなー。定期考查が終わってばっかなのに勉強するだなんてなんか勿体無いもんnaー」

俺の呻き声を『勉強していなかつた』と受け取ったのか、本仁田くんはホッとした顔をしながら自分の席に座つていった。

だが、本仁田くんは俺の呻き声が『勉強していなかつた』から漏れたものではなく、『昨日の勉強』を思い出して漏れたものだとは一遍も想像しないだろ。しなかつただろ。

昨日、俺は赤久奈（あかひな）さんと話したとおり彼女の家で勉強を教えてもらつた。

普通、女子の部屋に上がると漫画とかならドキドキするはずなのに、そんなことはなかつたぜ。むしろ問題の解答を間違えるたびにビンタをしてくるので「今度はいっぴンタがくるのだろうか？」と別の意味でドキドキしてしまつた。

それだけならまだしも、昨日は寝ないで勉強をさせられた。文字通り一秒も寝ないで。世間一般で言つ『一夜漬け』と呼ばれたり『夜鍋』とも呼ばれるだろつ。

太陽が昇り始めた頃には、俺は頭を揺らしながら問題を解いていた。

そんなスバルタな勉強時間に付き合わせた元凶である赤久奈さんはまるで充分な睡眠を取ったかのようなさわやかな顔をし続けていた。

た。

そして登校中も、意識が半覚醒となつている俺を差し置いて赤久奈さんは「元気ハツラツッ！」と叫び出しそうな顔をしながらバンバン問題を出してきた。そのときの俺は意識が目覚めていなかつたため適当に答えていただろう。その結果何回かビンタを貰い、学校に付いた頃にはビンタの影響で目を覚ましていた。気が付いたときには頬が腫れていた。

その後、赤久奈さんは「ちょっと用事がある」と言い下駄箱で別れた。より正確に言うなら開放された。そしてすぐにトイレに直行してビンタされた箇所を水で冷やし、教室に辿り着いてからは死んだかのように眠りについていたというわけだ。

……今思えば本当に頑張ったと思うよ俺は。

そんな独自を繰り広げていると、学校のチャイムが響き渡つた。俺は「充分に寝れなかつたな……」と目を擦りながら呟いた。

まあ俺の学校のHRなんかネタにするほど面白こことを話さないので割愛しよう。

現時刻は俺にとっては決戦の日でもある物理の時間だ。

「はい、それじゃあ小テストを始めるよー」

傍から見れば若く見えるような茶髪の長い髪を持つた女性がクラス全員に対して言った。この方こそが物理の教師でもある浅間尾根（あさまおね）先生だ。浅間尾根先生は手に数枚のプリントを持ちながら「これから配るから早くしろ」と顔で訴えていた。。俺を含んだほとんどの生徒たちが机の上に置いてある教科書や参考書などを机の中に片付けていつでもテストを受ける体勢を作った。

「それでは配布するから私語を慎むようにね

そう言いながら浅間尾根先生は前一列の生徒全員にある程度の枚数だけプリントを渡した。そしてまるでバトンリレーのようにならへ後ろへとプリントを渡していった。ちなみに俺の席は一番後ろなのでやつてきたプリントの枚数は一枚だ。これは当然の結果なのだが少し寂しさを感じるのはなぜだろうか？

俺はふと、本当にふと思いつきで赤久奈さんの席を見た。赤久奈さんの席はクラスの中心で、まるで自分がクラスの中心人物だと訴えているような威圧感を感じた。

その赤久奈さんが俺の視線に気がついたようでこちらを振り向いた。そして急に口パクをしてきた。

満点以外は許さないわよ。

なぜかそう耳で囁かれた気分になつた。俺は背筋が凍つた気分を味わつた。

そして俺は「ふふん」と自信満々に咳きながら赤久奈さんに対してもぱくでこう伝えた。

馬鹿が出来るわけねえだろ！

俺が伝え終える前に赤久奈さんは前を向き直っていたので伝えることが出来なかつた。

それにして俺が満点を取れるわけがないだろ。あの天才はそんなことすらもわからないのか。と心中で文句を言つた。

実際にこの山多摩（やまたま）高校の小テストは小テストと冠しては駄目だろと思えるぐらい無理難題な問題が数問含まれている。基本的に満点を取れるのは手で収まるぐらいの数しか出でこない。ちなみに俺は毎回〇点ですよ。

「はい、それでは始め！」

浅間尾根先生は手をパンツと綺麗に鳴らした。テスト開始の合図だ。

「まあ『気楽にやりますかね』

俺は誰にも聞こえないように咳きながらプリントに書かれてある問題をサッと読んだ。

「…………」

俺はその問題を読んで絶句してしまった。いや、テスト中なのだから口を閉じているのは当然なのだが、例え口が利けたとしても絶句していただろう。

問題が、簡単すぎる。

勿論、中には難しいものもある。俺みたいな馬鹿でも「あ、コレは難しいな」と思える問題が存在する。だけどその問題に必要な公式や計算式がパツと思いつく。それは前の自分ではありえなかつた思考回路だ。

俺は自分の頭を疑いながらも、プリントに自分が正しいと思つ解答を書き進めていった。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

数分も掛からないついでに、俺は問題文の間に自身のある解答で埋め尽くした。

そして頃合いを見計らってか、浅間尾根（あさまおね）先生が「止めてください」と透き通った声で言った。

周りからは「マジかよ早ッ！？」という声が飛び交っていた。どうやら他の皆は苦戦をしたりして。

「はい、それでは後ろから前に送りてください」

と、浅間尾根先生が言つので、俺は言われたとおりプリントを前のまゝに送った。

「な、なあお前出来たかよ？」

急に隣にいる本仁田（ほにた）くんが自身無むをせつに聞いてきた。どうやら本仁田くんも出来なかつた様子だ。

「ま、まあまあ出来なかつたかな？」

俺はいつもどおりの様子で本仁田くんに返した。すると「だよねー、いくらなんでもあの問題は難しそぎるよ」と呟いていた。

俺も「まあ半分ぐらい取れてれば良い方かな?」と呟いていた。

その後、残つた時間で物理の授業が行われた。
勿論、ノートで埋め尽くされた文字は理解不能なものばかりだった。

「それでは、今日のテストは放課後までに返すので」

浅間尾根先生がそんな不吉なことを言つてから、チャイムの音と同時に教室を出て行つた。

俺も次の授業の準備をしようとバッグの中身を整理しようとしたら、赤久奈（あかぐな）さんがなぜか俺の目の前に立つていた。

「…………」

赤久奈さんは無言で俺の前に立つてゐるだけなので俺は無視して次の授業の準備に取り掛かつた。

「無視しないでよ！？」

バンッ！ と赤久奈さんが勢いよく俺の机を手で叩いた。少し怖かつた。

手を机で叩いたときに少し乾いた大きな音が教室中に響き渡り、半分ぐらいの生徒が俺と赤久奈さんの方をチラリと見てきた。

「……あの二人が一緒にいるなんて珍しいな」

「……つつかあの二人つて仲良かつたっけか？」

「……そんなわけないでしょ？ だつてあの二人つてまったくの対極の位置にいる人物じゃない？」

「そうだよな、馬鹿と天才が中良いいわけないよな」

そんな教室中にいる生徒の小声がチラチラと聞こえてくる。そして最後のほうを聞いて俺は少しショックを受けた。堂々と馬鹿と言われるならまだしも小声で馬鹿といわれるとな泣けてくるものだ。

「…………」じや話じついわね。ちょっと来なさい」

そしてその小声を聞いていたのか、赤久奈さんが俺の手を掴んでは教室の外へと歩いていった。勿論のことなのだが俺は手を掴まれているので一緒に教室を出る破田になってしまった。

「おおおおー！一緒に出て行つたぞーー？」

「なになにー！？ そういう関係なのーー？」

「これをミリーは『愛の逃避行』と題しましょー」

……なんか凄い勢いで誤解を招いているような気がするのは、面倒なので氣のせいだと思つておくか。

「…………雲取（くもとつ）…………ツーーー」

そして教室を出る瞬間に俺は「まるで好きな女の子を取られた哀れな男の子」的な雰囲気を醸し出すクラスメイト約1名の恨めしそうな声を聞いた気がするが、本当に『氣のせいだと思つ』ことにした。

「なんつづつでお前なんだよおーー！」

「お、落ち着け川苔（かわのり）ーーー！」

……なんか「まるで好きな女の子を取られた哀れな男の子」的な雰囲気を醸し出していったクラスメイトが教室の中で叫んでいる声が聞こえただが、心の底から面倒だと思つので『氣のせいだと決め付けた。

そして赤久奈さんに連れて行かれるがままに無人の教室に辿り着いた。

なんだろうか？ カツアゲされるのだろうか？

「で？　どうだったの？」

なんの脈絡もなく赤久奈さんが尋ねてきた。主語すらついてない
その疑問文に俺は解きよつがなかつたので「？」と顔で訴えるしか
なかつた。

「今日の小テストよ」

赤久奈さんが痺れを切らしたかのように付け足すかのように言つ
てくれたので、俺は「ああ、それね」と謎が解明した顔で訴えた。

「勿論、今日は半分ぐらいは取れている自身があるよ」

「半分じゃ意味無いわよ！？」

俺が自信満々に言つと、赤久奈さんは心底残念なものを見る目で
叫んできた。

……半分でも凄いと思つんだけどなー。

「いい、今日帰つてきたときにはちゃんと私に見せなさいよね。見
せなかつたら殺す。見せて満点じゃなかつたら」「うーすー

赤久奈さんが間の抜けた声で言つてきた。

おいおい、それじゃあ背水の陣じゃないか。なぜ俺はこんな日常
生活の中で命の危険を感じなければならないのだろうか？

第1話？『出会い』 雲取亘視点

「それじゃ、テストの結果を楽しみにしていろわよ」

赤久奈（あかぐな）さんは「バイ」と手を振りながら先に無人（もつとも、俺と赤久奈さんがいるので無人ではない）教室を出て行つた。

……もしかしたら今日が俺の命日になるかも知れない。

俺は静かに目を閉じ、合掌をした。

時というのは残酷なもので、例えどんなに抗おうと流れ行く時間を塞き止めることは不可能に近い。

つまり何が言いたいのかといふと、現在時刻はテストが返却される放課後になつていいということである。今日に限つて時間が経つのが早く感じる。

暇人なのか、浅間尾根（あさまおね）先生は既にいつでもプリントを配れる状態になつていた。

「それでは今日のテストを返します。出席番号1番の方から来てください」

浅間尾根先生は早速出席番号1番の生徒の名前を呼び、次々と生徒たちがテストを返してもらつていた。

テストを返してもらつた生徒の顔は、あるものは安心しており、あるものは絶望していた。

「次、雲取くん」

程無くというかあまり時間が経たないついに俺の名前が呼ばれた。
俺は少し憂鬱な気分にもなりながらプリントを返してもいい。

「……雲取（くもとつ）くん」

「？ はい？」

プリントを受け取らうとしたとき、なぜか浅間尾根先生が睨んで
きた。

「……後で職員室に来なさい」

浅間尾根先生はさすがに残し、まるで投げ捨てるかのように俺に
プリントを渡してきた。

「な、なんなんだよ……？」

俺は少し戸惑いながらも浅間尾根先生から距離を離し、自分のプリ
ントを確認した。

俺の名前の横には、俺とは縁の遠いはずだった『満点』といふ文
字が書かれてあった。

「…………！」

俺は驚き、そして緊張しながらも何度も何度もその『満点』の文字を確認した。

正面から見ても満点。右から見ても満点。左から見ても満点。上
から見ても満点。下から見ても満点。裏から見ても……さすがに裏
面からは確認できなかつた。

それでも、俺が、この俺が満点を取つたという事実がここに残つ

た。

ただ、少し呆気無を過ぎてコアクションがどうにも取りこくつ

た。

「……よお、どうだつたよ……？」

急に本仁田（ほにた）くんが憂鬱な顔をしながら聞いてきた。顔の様子から察するに残念な結果になつていたらしい。

「ま、まあまあかな……？」

俺はそんな本仁田くんの様子を察し、適当に誤魔化した。

「おーい、こつちだ雲取くん」

職員室に入室してすぐに浅間尾根先生は俺に気付き手を上げて位置を示してくれた。

全員のテストが返却されたその後、俺は言われたとおり職員室に訪れて浅間尾根先生の所までやつて来ていた。

「先生、一体全体なんの用でしようか？」

俺は開口一番、浅間尾根先生に質問した。対する浅間尾根先生は「えつと……そのだな……」と少し言ごとにくそつな仕草をしてから言った。

「お前が、もしかしてカソーニングしたんじゃないのか？」

「…………へ？」

浅間尾根先生がいきなり突拍子も無いことを言つたので、俺は間抜けな声を出してしまった。

「いやな、お前のことを見つけてるわけじゃないんだけど今までのテストの結果を考えてみるとどうにも納得が出来ないんだよ」「…………」

浅間尾根先生がそんなことを言つたため、俺は「ああ、なるほど」と納得した。

確かに俺みたいな頭の悪い生徒が小テストとはいいくなり満点を取つてしまつのは不思議どころの話ではない。それはもう疑いようのある話である。当事者の俺でさえ疑つている。

ただハツキリと言つておくが、カンニングなんてしていない。

ただまあ、そんなこと言つても簡単に信じてくれるわけ無いか……

……

「先生を感じて正直に言え、カンニングしたか？」
「してません」

俺は先生のことを信じた。

「…………あのな、確かに言つにくいことかもしけないが事実は言つてくれ。でないと色々と問題が起るんだ」

浅間尾根先生がそう言つた瞬間、俺は「あ、コイツ疑つてているな」と心中で直感してしまつた。信じた俺が馬鹿だった。

「せめて証言があればいいんだけどなー……」

浅間尾根先生がまるでワザと俺に聞かすように大きな声で言つた。

大変ムカついたので殴りつかと思つたが場所が場所一（職員室）なので止めておいた。

それにしても証言ね……。そんな都合のいいものが存在するわけ

「私が証人になりますよ、浅間尾根先生」

あつた。

まるで赤久奈さんは、この瞬間、この刹那を見計らつたかのよう
に職員室に入室してきた。

第1話？『出会い』　雲取亘視点

浅間尾根（あさまおね）先生は、目を見開きながら赤久奈（あかぐな）さんのことを見ていた。

「えつと、証人とはどうこうとかしら赤久奈さん？」

そして浅間尾根先生はすかさず赤久奈さんに対して質問をした。

「それはですね、昨日私は雲取（くもとり）くんに付きつ切りで勉強を見てあげたんです」

「あー……ああ、それなら俺も証人になれますね浅間尾根先生」

浅間尾根先生が口を出す前に、長尾丸（ながおまる）先生が思い出したかのように口を挟んできた。

「どういうことですか長尾丸先生？」

「いやあのね、昨日雲取には補習をさせてたんだけどその時に赤久奈も一緒に居たらしくて鍵を返しに来るときに一緒に来てたんだよ」

浅間尾根先生の鋭い目線を気にせず、長尾丸先生は淡々と言ひ述べた。

俺はこのときに限つて、長尾丸先生のことを見直した。

「……なるほど、確かに赤久奈さんが勉強を教えればあるいは満点を取れるかもしれませんね」

浅間尾根先生は「ふう」と溜息を漏らしながら椅子に寄りかかっ

た。

「雲取くん、疑つて悪かつたわね」

「あ、いえ別に……」

急に浅間尾根先生が態度をコロッと変えてきたので俺はつい戸惑つてしまつた。元々、浅間尾根先生自身もそこまで言つほど疑つていなかつたのかもしれない。

俺はてっきりコレで解放されて家に帰れる。そう思つていたが、

「許しませんよ」

なぜか赤久奈さんが怒りを露にして言つた。

「……まあ疑つたのは悪かつたわよ赤久奈さん、こうして反省しているし」

「人を疑つたらそこから戦争ですよ浅間尾根先生」

おそらく俺のことを話しているはずなのに、なぜか俺は蚊帳の外の気分を味わつていた。

それにしてどうして俺のことなのに赤久奈さんが怒つているのか皆田見当が付かない。

「それじゃ、一体どうやって償えば良いのかしらね?」

「一つだけ、私のお願ひを聞いてくれますか?」

「……願いの内容にもよるわね」

赤久奈さんは浅間尾根先生に対して「ありがとうございます」と呟いた。

「それではお願ひなのですが

」

「私が雲取くんの補習を行つても良いでしょうか?」

「 「……え?」」

俺はつい間抜けな声を漏らしてしまった。しかしそれは浅間尾根先生も同じことで、明らかに驚いた顔をしながら赤久奈さんのことを見ていた。

「それってどうしたこと?」と俺が聞こうとした瞬間、今まで会話に入つていなかつた長尾丸先生が誰よりも早く行動していた。

「いやははは! 勿論言いに決まつてゐるじゃないか! うん! 生徒が生徒を教えることにより復習にもなり予習も出来る上に定期考査に対する予想力や対応力も跳ね上がる! まさに画期的な方法だ!」

長尾丸先生の口は、コレまでにないぐらいに輝いていた。ちょっと気持ち悪かった。

「ちよ、何を言つてゐるんですか赤久奈さん! ? 長尾丸先生も何を言つて

「おつと浅間尾根先生? コレは我が山多摩(やまたま)高校に誇るべき校則第14条の『生徒の自主性』にピタリと当てはまる、

つまり問題は無ことこう」とですよー。」

やつと落ち着きを取り戻したのか浅間尾根先生はすかさず「反論をするが、長尾丸先生が生徒手帳に書かれた校則を使い正論を言つてきたため喉を詰まらせていた。

「た、確かにそうかもしだせんが補習が必要な生徒を別の生徒に任せるこというのは教育者としてどうかと思いますよー!?」

「おつとおー! それはもう安心ですよー! なんせその点はこのテストが物語つてこますー!」

長尾丸先生はいつの間にか俺のバッグから取り出したのか満点の物理の小テストを浅間尾根先生に押し付けていた。

浅間尾根先生も反論する言葉が見つからないのか「グツー」と面を噛んでいた。

「ま、まあ今回に限つては認めてあげますよ

浅間尾根先生がそいつと、誰よりも部外者であるはずの長尾丸先生が誰よりも喜んでいた。

「ピヤッホーッ! これで放課後の補習生徒の面倒を見なくて済むぜツー!」

ああ、なるほどそういうことかこの駄目教師め!

ただ、その言葉をしっかりと耳に聞いていた浅間尾根先生はピクリと反応した。

「……長尾丸先生? ちょっとといいでですか?」

「……あ、やべ。俺早く仕事しないと

「ち ょ つ と い い で す よ ね ？」

「…………はい」

長尾丸先生は浅間尾根先生に連行される形で生徒談話室に連れて行かれた。

「それじゃ、私たちも行こひ」

「う、うん……」

俺も赤久奈さんに連行される形で職員室を出て行った。その数秒後、長尾丸先生の断末魔を聞いた気がするが、聞かなかつたことにしておいた。

「結局、補習の件はまた明日改めて聞かないとな」

俺は自分に対して確認するように小さく呟いた。

程よい具合に空に浮かんでいる太陽を眺めながら、俺は赤久奈さんと一緒に下校していた。

「ねー、なんでさつきから太陽を見るの？」

「んー、この時間帯に太陽を見るのが珍しかったからかな？」

俺がそう適当に答えると、赤久奈さんは「ふうん」と興味無さそうに呟いた。

「そりゃあ赤久奈さんはどうして俺の勉強を見てくれるの？」

俺は素朴で、素朴な質問をした。

それを聞いて赤久奈さんは少し真剣な顔になつた。

「……私ね、勉強しなくても高得点が取れるんだよ」

「うん、自慢だね」

俺がそう嫌味を言つと、赤久奈さんは「うん、そうだね」と言った。どうやら本人も自覚しているらしく。

「だからね、雲取くんと勉強したときこそ、ああ、勉強ってこんなに楽しいんだ……って初めて思えたんだよ」

「…………」

それは、俺にとっての嫌味。だけど赤久奈さんにとっての娯楽だった。

「だからね、勉強を見てあげるとかじゃなくて、勉強を見たいって言つたほうが正しいのかも知れないね。私は勉強をしたいんだよ。だから」「言つね」

赤久奈さんは少し切なそうな顔をしながら、俺に対して言つた。

「一緒に勉強してもいいですか？」

そのときの俺の解答は、既に決まっていた。

「俺の記憶力の悪さは性悪だよ?」

きつといひから、俺の勉強は始まつたんだと思つ。

間章　『コンプレックス』　三人称視点（前書き）

今回の話は別に読まなくても平氣なシーンです

間章『コンプレックス』三人称視点

五月末の頃、眼鏡を着けた少年 雲取亘（くもとりわたる）は自室で勉強していた。

ここ一週間で雲取の勉強方法は変わり、目で見て分かるように学力が上がっていた。

それは紛れも無い雲取自身の努力の結果ではあるが、雲取本人はそう思っていない。

「……ふう、ちょっと休憩」

雲取はそう呟いてから、椅子から立ち上がってベッドに飛び込んだ。

弾力を持ったベッドは雲取の疲労しきつた体を優しく包み込んだ。

「……」

雲取はベッドの上で横になりながら考え方をしていた。

雲取には大切な友人でもあり恩人でもある赤久奈奈乃香（あかぐななのか）と呼ばれる、黒髪で美しい女性がいる。

赤久奈は、雲取に勉強を教えた人物であり、雲取にとつては唯一無二の友達だ。

「……なんか胸がモヤモヤするなあ……」

雲取は自分の胸を擦りながら呟いた。

雲取は赤久奈のことが好きだった。

ただ、その好きという思考そのものは理解しているのだが、それが果たして「友人として好き」なのかそれとも「異性として好き」

なのががハツキリしていなかつた。

「…………」

雲取は急に起き上がり、そして部屋に備え付けられてある姿見の前に立つた。

「……はあ、やつぱ苦手だな」

雲取は自分の姿を映し出す姿身に触れながら溜息を吐いた。姿見には当然の如く雲取の姿が映し出されていた。そして雲取はその姿をジックリと確認し、今度は眼鏡を外して自分の顔を眼を凝らしてみた。

「……やっぱ駄目だわ」

雲取はそう呟いてから、眼鏡を着けなおした。雲取は自分の顔に少なからずコンプレックスを感じていた。努力できるものなら直したいと本人は強く願つていてのだが、ちよつとやそつとの努力では顔を変えることは出来ない。一度は本気で整形手術をしようと考えていたが、さすがにそんなことをする金は無い。

「…………なんで俺ってこんな顔なんだろうな」

雲取は姿見に映った自分の顔を、静かに触った。そして「さて、勉強再開」と呟きながら椅子に座りなおしペンを握り締めた。

姿見には、雲取の指紋がクツキリと残っていた。

第2話？『顔立ち』赤久奈奈乃香視点

5月の最後である31日の日、私こと赤久奈奈乃香は放課後の教室でぼんやりと外を眺めていた。

「奈乃香、帰んないの？」

私の意識が眠くなつてきただ頃に、女友達の月夜見莉亞（つくよみりあ）が声をかけてきた。

「うん、今日はちょっと用事があつてね……ごめんね」

「そつか、わかった。それじゃ」

私が申し訳無さそうに言つたと、莉亞は何も聞かずに帰つてくれた。そして教室内の人間が私を含めて一人になったとき、私は席を移動した。

「それじゃ、始めよっか」

「うん、今日もよろしくね」

私がある男の子の席の前に移動すると、男の子は少し申し訳無さそうに言いながら勉強道具一式を取り出した。

私も近くにあつた誰かの椅子を借りて座つた。

「それじゃ、今日は数学の公式を覚えましょ」

「了解」

私が今日の勉強範囲を指定すると、目の前にいる男の子は返事をしてから数学の教科書を開いては今日勉強したところを復習し始め

た。

男の子の名前は雲取亘くもとりわたり。つい先日行われた定期考査の結果によつて教師人からは補習を強いられるようになつてしまつた……失礼な言い方だがこの山多摩（やまたま）高校の中でも指折りの馬鹿だつた。

雲取くんは今まで一人図書室で勉強していたのだが、一週間前ぐらいに色々あつて今では私が勉強を教えてあげることになつていた。

友達と一緒に勉強をする機会がないので、実を言つと私は凄く喜んでいた。

「うーん……やっぱ分からないな」

「どこが分からないの？」

雲取くんが声を聴らせながら考え方をしていたので難しい問題に突き当たつたのだと私は勝手に自己解釈した。

「いや、問題が分からないんじゃなくて赤久奈さんのことがちょっと分からないんだよ……」

どうやら私の解釈は間違つていたようだ。

「はいはい、私のことはどうでもいいから勉強しなさい」

「いや、これは結構重要だよ？ この謎が解明されないと俺は永遠にこの問題を解かないだろ？」

雲取くんが中途半端な脅しをしてきたので、私は「はあ」と溜息を吐いてしまつた。

「で？ 何が謎なの？」

「うん、やっぱ皆が下校した放課後の後で勉強するよつぱりうちの家で勉強したほうが効率が良いと思うんだよね」

珍しいことに、雲取くんが真面目なことを言つてきた。これまでは「トカゲとイモリの違い」や「漫画雑誌を買うのと単行本を買うのではどちらが効率が良いのか」等と言つた勉強とはかけ離れた疑問を広げていたので大きな進歩だつた。

「だけどその謎はこの間解明されたんじゃなかつたつけ？」

「いや、やっぱ納得できないよ」

私が面倒くさいなと思いながら言つと、雲取くんは「うーん」とさらに考え始めてしまつた。

実を言つと、どちらかの家で勉強しようといふ話は既にいつか前ぐらには挙がつていた。この間、雲取くんの補習を担当していた長尾丸（ながおまる）先生が「別に学校で補習みたいなことしなくてもいいぞ。むしろするな、俺が早く帰れない」みたいな自己中心的なことを言つていたので折角だしどちらかの家で勉強しようと話し合つたのだが。雲取くんの家は姉妹が沢山いるので勉強するには適さない環境となつてゐるらしい。

消去法で言うなら私の家で勉強することになるのだが、私の家も弟がいるので勉強には適さない環境になつていて。正確に言つと恥ずかしいから雲取くんに弟を見せたくないだけだ。

そして妥協に妥協を重ねて結局学校で勉強するといつ結論に落ち着いたのだ。

「それにしてもこの間遊びに行つたときは弟さんとは会わなかつたけど?」

「あのときはちょうど友達の家に泊まりに行つていたのよ。だから雲取くんを家に誘えたの」

「あ、それじゃあ弟さんが泊りとかで家にいなかつたらまた赤久奈さんの家に遊びに行くことが出来るの？」

「……まあそういうことだけ。そんなことより勉強しなさいー。」

いつの間にか長話をしてしまった。

少し反省しながら、私は雲取くんに勉強を強制させた。

そして日が傾いて、今日の勉強時間も終了を迎えていった。

補習が終わって数時間後ぐらい。私は家に帰つてテレビを観ていた。

現在の時刻は8時ぐらい。そろそろ私の好きな番組が始まる時間だつたのでチャンネルを回した。

「ただいまー」

そしていざリモコンに手をつけようと思つた瞬間、玄関から聞きたなれた声が響いてきた。

「あ、また両親いないの？ 姉ちゃんただいまー」

「おかえり奈蔵（なくら）。アンタ最近帰つてくるの遅くない？」

「いいじゃん別に、姉ちゃんに迷惑かけているわけじゃないんだし」

私が自分の弟でもある奈蔵に対して叱つたのだが、叱られた奈蔵本人には反省の色が見られなかつた。

第2話？『顔立ち』 赤久奈奈乃香視点

赤久奈奈藏（あかぐななくら）。それが私の弟の名前だ。
現在は中学一年生で校則が緩い」とを「」とに髪の毛を金髪に染めている。

金髪に染めると不良のイメージが偏りそうなのに、奈藏は元々の顔立ちが良いためかむしろ金髪が似合いで学校では人気者扱いされているらしい。

私は勉強しか出来ない地味な女の子だから、そんな奈藏のことが少し羨ましいと思つときがある。

「奈藏、『』飯食べる？」

「いや、食べてきたからいいわ」

私が質問すると、奈藏は手をふりふりさせながら返事をしてソファに体を預けた。

「そだ、俺明日友達ん家（ち）に泊まりにいくから家にいないわ」「え？ うん、分かつたけど……もしかしてまた女の子の家？」
「そうだよ、街中ですんげー可愛い女性に出会つてわ。これがまた独身なんだつてよ」

「ちよ、独身つてことはまた年上の人！？」

「そ、今度は干支が同じ」

奈藏が平然と返事をしてきたのに対しても私は頭がクラッとなつてしまつた。
先ほども言つたとおり奈藏は顔立ちが良い。そのため女性にモテる。

「」の間なんて家のポストの中にラブレターが10通ぐらい詰めら

れていたほど女性人からモテている。

ただ当の本人である奈蔵は年上の美人が好みらしい。

よく街中に出かけては女性に話しかけている光景を何度か見たことがある。そのたびに初対面の人と仲良くなれるのがとても妬ましい。そのたびに私は奈蔵に冷たい視線を送っていた日々を思い出してしまった。

「今更だけどさ、流石に年上の女性を“友達”呼ばわりするのはどうかと思うけど」

「俺にとつては友達だよ」

奈蔵は「さしろちやーん」とおそらく明日泊まりに行く家の女性の名前を気持ち悪い声を出しながら呼んでいた。

うん、気持ち悪い。

「……そつか、明日いないんだ」

奈蔵が家にいないことは何回かあるのだが、それでも私は少し寂しさを感じた。

次の日。私はいつもおり登校しては自分の席に腰を落ち着けた。

「いやー、5月も終わってしまいましたなー」

友達の莉亞（りあ）が「うんうん」と何かに納得しながら近づいてきた。本当に何に納得しているのだろうかコイツは？

「そうだね、そろそろ梅雨が始まるよねー」

私は窓の外をぼんやりと見ながら言った。今日はまだ雨が降っていなかつたから傘が必要ないかもしぬないが、今度からは必要になつてくるかもしない。

「だよねー、今日の午後から梅雨が始まっちゃうもんねー」

早速傘が必要になるかもしぬなかつた。

「え？ 今日雨降るつけ？」

「うん、なんか今日は結構降るらしいよ」

「あちゃー……私今日傘持つてき忘れちゃったんだけど」

「お、奇遇だね。私も傘持つてくんの忘れたぜ！」

「……何で雨だと分かつてていたのに忘れてくるのよ莉亞？」

私がジト目で莉亞に尋ねると、莉亞は「あははー、ちょっとだけくつて……」と言い訳していた。

「あああ赤久奈！ 僕が傘持つてるぞー！ よかつたら今日の放課後一緒に帰らないかー！」

なぜか急にクラスメイトの川苔（かわのつ）くんがやけにテンションを高くしながらじつにせつて來た。

「お、なんだ川苔傘持つてんの？ んじゃー遠慮なく入れさせてもらひうねー」

「お、おい！ 僕は赤久奈さんに聞いていて月夜見（つゆみ）には聞いてねえよー 引っ込んでろー」

「なんだとーー！ 別にいいじゃないか一緒に入つたつてー よく

見たらそれ折りたたみ傘じゃないか！　お前の心はその折りたたみ傘のように器が小さいなー！」

「か、傘が小さいのはどうでもいいだろー…？」

突然、川苔と莉亞が喧嘩をし始めてしまいその場が騒がしくなつてしまつた。

「ま、まあまあ……落ち着きなつて莉亞。川苔くんも騒がないの」

「のままだと拉致があかなそつたので私はとりあえず一人を落ち着かせた。川苔くんは意外なことに「あ、赤久奈が言うんだつたら仕方がないか……」とすぐに落ち着いてくれた。それに呼応するかのように「むう……」とどこか納得できないといった顔をしながら莉亞も落ち着いてくれた。

「私のことは気にしなくていいからさ。川苔くんは莉亞を傘に入れてあげてくれない？」

「え、いや……でもそれじゃあ赤久奈はどうするんだよ？」

「実を言うと私は学校に置き傘しているの。だから大丈夫。それに川苔くんの家つて莉亞の家と近いでしょ？　だから莉亞のことを送つていつてくれる嬉しいなー」

「あ、赤久奈がそう言つんだつたら送つてくよ……感謝するんだな月夜見」

川苔くんは少し納得いかないといった顔をしながら私の提案を肯定してくれた。そして莉亞も「やつたー！　川苔大好きー」と喜んでいた。

第2話？『顔立た』 赤久奈奈乃香視点

本当のことを言つてしまつと置き傘なんてしていない。でも傘に
関しては心配たりがあるので心配はなかつた。

「今度ナルド着つてやるよ。なあに、傘を用意していただご褒美だ」
「別に赤久奈（あかぐな）さんのために用意しただけで用夜見（
つくよみ）のために持つてきたわけじゃねえよ」

川苔（かわのつ）くんと莉亞（りあ）のやつとりを聞いて私はつい笑つてしまつた。ちなみに『ナルド』といつのは有名なファーストフード店の略称である。正式名称は『クドナルド』だ。
私は一人のやつとりを耳に聞きながら、少しどよどよとした空を見ていた。

そして放課後。担任の長尾丸（ながおまる）先生の指示によりH-Rはあつと言つ間に終わつた。

窓の外を眺めてみると、莉亞が言つたとおり雨が降つていた。

「ようし、それでは帰ろうではないか川苔くんよー。」「なんでお前が偉そうにしているんだよー。？」

教室のドア付近では川苔くんと莉亞が帰る準備をしていた。

「あ、おーい奈乃香！ 私は川苔に送つてつてもひつかう先に
帰るよー！」

突然、莉亞が手を振りながら声をかけてきたので、私も手を振りながら「ぱいぱーい」と返事をした。

「あ、川苔くん。莉亞をよろしくね」

「ま、まかせてくれよ赤久奈さん！ 無事にお送りしてくれるよーーー！」

川苔くんに声をかけると、なぜか顔を赤くしながら返事をしてきました。

「ほら行くぞー」

「あ、待てつて！」

そして莉亞が先頭になつて一人とも先に帰つていった。

「ふう、それじゃ私たちも帰りまよっか」

私は当然の如く雲取くんの腕を掴んだ。雲取くん自身も気付いていたのか、「まあ礼もかねて」と呟きながら鞄の中に入れてあつた折りたたみ傘を取り出した。

「やつすが雲取くん！ 用意が良いなー」

「まあ折りたたみ傘だつたら毎日バッグの中に詰め込んでるからね」

「それじゃ行きましょ」

「うん」

私も雲取くんと一緒に教室を出て行つた。

私と雲取くんは一つ同じ傘の下に入つて帰路を歩いていた。

折りたたみ傘だということと一人同時に入っていることもあってかやはり体全体を防ぐことが出来ずどうしても肩や鞄が濡れてしまう。

「今度からはちゃんと傘を持ってきてね」

「大丈夫よ、明日からはちゃんと用意するわ」

「もう6月だし折りたたみ傘を持っていたほうがいいかもしけないね。突然雨が振るつてことも考えられるし」

「それもそうね」

私と雲取くんはそんな他愛もない会話をしながら静かに歩いていた。

この時間帯にこの辺りの道を通る人はいないのか、道路は私と雲取くんしか存在しなかった。

その場に響く音は雨と私たちの話し声だけで、なんだかとても綺麗だなと思つてしまつた。

「雨の音が気持ちいいね」

「…………うん」

雲取くんも私と同じことを考えていたのか、どこか気持ち良さやうな顔をしながら言った。

……といえば、男の子と一緒に傘に入つて帰るのって奈蔵（なぐら）を除いたら初めてだな。

「……相合傘みたいだな」

「? なんか言った赤久奈さん?」

「別にも言つていないわよ」

私は少し顔をにやけさせながら雲取くんのことを見た。雲取くんは頭に「？」が付きそうなほど疑問な顔をしていた。

「……赤久奈さんと一緒に帰ると、なんだかあの頃を思い出すなあ」

「あの頃って？」

「中学生の頃、仲の良かつた幼馴染がいてね……雨が降った日はいつも一緒に帰つてたんだよ」

「へえ、ちなみにその幼馴染の子はなんて名前なの？」

「日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）って言つた名前だった

「……“だつた”？」

雲取くんがなぜか含みのある言い方をしたのでつい気になってしまった。

「ああ、今もその名前なんだけじね、ちょっと訳ありで別の名前も使つているんだよ。まあ霞のことに関しては昔彼女自身に『あまり話さないでよね』と口止めされているから詳しく話せないよ、ごめんね」

「ふうん……」

雲取くんがなぜか申し訳無さそうに謝つてきたが、そのときの私は別に謝る程のことだとはちつとも思つていなかつた。

その後、私は近い将来に日向沢ノ峰霞といつ人物と出会つことになるのだが、それはまた別の話である。

第2話？『顔立ち』赤久奈奈乃香視点

……それにしても訳ありで別の名前を使いつつ一体全体どうこつた事情があるのでだろうか？

その辺が凄く気になつたが、『あまり話さないでよね』と本人から釘を刺されているのなら尋ねることは不可能だろ？

そしてその後も他愛のない会話は続いた。

雨が降っているため少し聞こえづらることは多かったが、それでも意思疎通は出来た。

そして夢中で会話をし続けていたら、いつの間にか私の家まで辿り着いていた。

「……雨で体濡れちゃったね」

「……うん」

私と雲取（くもとり）はお互いの体を見合つた。小降りとはいえ傘の面積が小さかつたため肩や鞄が濡れていた。

「ちよつと家に寄つてく？」

「え、いやいいよ。このまま帰ることにするよ」

さすがに送つてきてもらひながら濡れたまま帰すのも悪いと思い私は家に寄ることを勧めたのだが、雲取くんはその誘いを丁寧に断つてきた。

だがそんな簡単に引き下がる私ではない。

「駄目よ、一応タオルで体拭いておきなさい」

「いや、どうせ雨の中帰るんだから関係ないよ」

なんとか寄りせよつと黙り続けるも、それでも雲取くんは頑固として拒絶してきた。

「関係あります。それに今日は私の家で勉強するんだから」「あれ？ 弟さんがいるから駄目なんじゃなかつたっけ？」
「弟は友達の家に泊まりに行つているから大丈夫よ、むしろ一人で寂しそうだよ」

私は少し本音を交えながら言つた。すると雲取くんは少し考える素振りをしてから「はあ」と小さく呟いた。

「それじゃ、お邪魔しちゃおつかな？」
「どんどんお邪魔しちゃいなさい」

どうどう折れたのか、雲取くんは私の家に寄つてこへことになつた。

とりあえず体を綺麗にするため、私は風呂でシャワーを浴びた。
「ふう、気持ちよかつたあ」

パジャマに着替えた私は頭をタオルで拭きながらリビングに向かつて歩いていった。
リビングに向かつと、雲取くんは鞄の中から教科書を取り出して勉強をしていた。

「あ、出たんだ。それじゃ勉強しようか」

私をチラリと見てから雲取くんは鞄の中を漁り勉強道具一式を取り出してきた。

勉強する気があるのは良いことだが、まずはその濡れた体をなんとかすることを優先しようと云取くん。

「その前にシャワーを浴びてきてくれないかしら？」

「大丈夫だよ、そこまで濡れてないし」

「駄目です。ほら、着替えは私の着てもいいから」

私は半ば強引に自分の部屋からとつてきた私服とタオルを雲取くんに渡した。服はなるべく男の子でも着れそうな物を選んできたつもりだ。残念ながら男の子の服がどういったものなのかよくわからぬので心配だが、奈蔵（なくら）の服を勝手に取り出していくのも悪いのでとりあえずこれで我慢してもいいしかない。

「……………これって赤久奈（あかぐな）さんの服？」

「そうよ

雲取くんは少し苦そつな顔をしながら私が持つてきた服を見ていた。

「あのときの言葉つて本気だったんだ……。やっぱ男の俺が女の子が一度着用した服を着るのはいやとか問題があると思つんだけど

……？

「？ どうして？」

私が質問すると、雲取くんは半ば諦めた表情をしながら「いえ、なんでもないっす……」と呟いてきた。

「それじゃ、シャワー借りるね

「うん、りやんと温まつてくのよ」

そして雲取くんは服とタオルを持ちながら風呂に向かっていった。それまでは暇なので、私は本を読むことにした。一週間ぐらい前に学校に置き忘れてしまった本だ。

「……やっぱこの本がなかつたら、私は雲取くんといつして勉強することはなかつたんだよね」

私は少しこの本に感謝しながらタイトルの部分を撫でた。そこで、大変なことに気がついてしまった。

「……電話置いてきちゃつた」

私は洗濯籠の中に入れたワイヤーシャツの胸ポケットに携帯電話を入れていたことを思い出した。

「どうして私って忘れやすいんだろ……」

私は忘れがちな自分の記憶力に少し恨みながら脱衣所に歩いてきた。

「えつと……あつた、よかつた」

私は洗濯籠の中から携帯電話を取り出した。そしてすぐに戻るつとしたとき、ふと風呂場のほうを見てしまった。

勿論、ドアは閉じてあるのだが、それでもシャワーの音が良く聞こえてくる。

「……」の扉の向こうでは雲取くんが裸になつて ツーーー

自分で言つておきながら顔を赤らめてしまった。目の前に偶然あつた鏡には、まるでリンゴのよう赤くなつた私の顔が映つていた。少し頭がクラッとなつてしまつた。急いでこの脱衣所から出てとりあえず心を落ち着かせることに決めた。

第2話？『顔立ち』赤久奈奈乃香視点

そして後一步で脱衣所を出る、といつ瞬間に足に何かがぶつかる感触を受けた。

「…………？」

私はほぼ反射的に足元を見た。すると右足……正確に言つと右足の親指が眼鏡に触れていた。

「」れつて雲取（くもとり）くんの眼鏡……？」

私は恐る恐る床に落ちてあつた眼鏡を手に掴んでみた。

「床に置きっぱなしにするだなんて危ないなあ……せめて洗面所に置けば良いのに」

私は扉の向こう側で暢気にシャワーを浴びている雲取くんに文句を言いながら眼鏡を弄んだ。

「そりゃ云取くんつて眼鏡かけてたんだつけ？」

私は雲取くんの顔を鮮明に思い出しながら呟いた。
人を顔を見るのが恥ずかしいためあまり人の顔を見ないようにしていたが、そりゃ眼鏡をかけていたかもしれないなどどうでもよさそうに思い出した。

「毎日眼鏡かけているから気がつかなかつたわ」

私は自分の失態に恥じながら、何と無く眼鏡を着用してみた。

「…………あれ？」

眼鏡をかけても私の身に異変が何も生じなかつた。そう、“ 何も生じなかつた” 。

「これ…………度が入つてない？」

私は一度眼鏡を外し、レンズが入つてゐるか確かめた。

うん、入つてゐる。

そしてもう一度眼鏡を着用してみた。

うん、何も生じない。

おかしいな？ 私の記憶だと眼鏡つて確かに視力の補正や遮光を目的としているはずだと思うんだけど……。私の場合は視力が『1.2』のため視界が少しづぼやけてもおかしくないんだけど……。

「あ、そういうえば確かに眼鏡の機能を目的としないお洒落なやつが存在するって聞いたことがあるな……えつと……ああ、そうだ確かに『伊達眼鏡』つてやつだ」

私は自分の頭の中から『伊達眼鏡』という単語を引っ張り出して、一度眼鏡を外した。

「これつてもしかして伊達眼鏡？」

私は誰かに確認したわけでもなく呟いた。

「でも何で雲取くんは『こんなものを…………？』

ピンポーンッ！

私の頭が思考に入りしそうになると、まるでそれを邪魔するかのように玄関のチャイムが鳴った。

私はつい携帯電話で現在時刻を確認してしまった。時刻は『19時00分』。親が帰つてくるには早すぎる時間帯だ。

「この間に一体誰だらう？」

私は突然の来訪客に少し疑問を覚えながら玄関まで歩いていき扉の鍵を開けた。

「はー、疲れた……」

扉を開けると、まるで当然のように私の弟である奈蔵（なぐら）が家に入ってきた。

「あ、姉ちゃん。ただいまー」

私はつい呆然としてしまった。そんな姉のことを意にも介せず奈蔵はリビングに歩いていつてソファに体を預けた。

「ちよ、奈蔵っ！？ アンタ確か泊まつてくるつーー？」

「ああ、それ？ 無しになつた」

やつとのことで氣を取り直した私は奈蔵に質問した。すると奈蔵は少し残念そうな顔をしながら言つてきた。

「な、無しって……？」

「あの女さあ、彼氏持ちだつた。ふざけんなよあのババア。危なかつたんだよ俺？ 後もつ少しでその彼氏さんとバッタリ出くわしちやう所だつたんだから」

奈蔵は「チツ！」と舌打ちしながら言った。ビンとなく不機嫌そくな霧囲気を出していた。

「ああ、そういうえば玄関に知らない靴があつたんだけど誰か客来てんの？ 女性だつたら紹介してよ。バスだつたら紹介しないで」

奈蔵は機嫌を直したのか（なんて軽い男だ）すぐさま調子の良い声で言った。そして私は「しまつた」と思つてしまつた。

「あ、アンタは早く部屋に戻りなさい！」

「え？ どうして？」

「いいから！ アンタと姉弟だつて思われたくないのよー。」

「うわ、さりげなくひでー！」

奈蔵は少し泣きそうな顔をしながら言つてきたが、そんなものに構つている余裕は私にはなかつた。

「いいから早く部屋に戻りなさい……」

「……女？」

「男」

「だったら部屋に引きこもる」

奈蔵は私が「男」と言つた瞬間すぐに霸氣を無くし、といといと階段を上つて部屋に戻つていつた。

このとき私は奈蔵の女に興味あるけど男に興味ない性格がありが

たいと思つたことはない。後々から考えてみるとむしろ男に興味があると気持ち悪いからどうやらかと言つと普通かこの性格。

突然、脱衣所のほうから叫び声が響いてきた。私はビクリッと体を震わせてしまった。

あまりの叫び声は少し耳を塞いでしまいよく聞いていたが、たが
雲取くんの声で間違いないと確信していた。

「く、雲取（くもとり）くん！？ 一体どうしたの！？」
「あああ赤久奈（あかぐな）さあああああああん！？」

私が脱衣所に向かつて叫ぶと、雲取くんがドタドタとやけに騒がしく音を響かせながらじつちに向かつてきた。よほど切羽詰つていののか上半身裸の姿だった。

「ちょ、上つ！ 何か着なさいよつ！」

私は異性の裸をあまり見慣れていないため反射的に眼を瞑つてしまつた。

「お、俺の眼鏡が！？」

「お、落ち着きなつて！？」

「おおお落ち着いてられつか！？」眼が、眼がああああああーー！」

雲取くんはどこかの大佐のように冷静さを失い叫んでいる。顔はタオルで隠しているため伺うことは出来ないがよほど焦っていることが伝わってきた。

「お、落ち着いて雲取くん、コレでしょ。はー」

私は手に握んでいた眼鏡を静かに雲取くんに見せた。
そして「シユバツ」という風を切る音と共に私の手から眼鏡が消えていた。そして雲取くんの顔に眼鏡が装着されていた。

……早いなおいっ！？

「……取り乱してゴメン」

雲取くんは顔を赤らめながら言った。自分がどれだけ騒いでいたのか自覚していたらしく、恥ずかしそうに顔をタオルで覆い始めた。

「！」の眼鏡を、ちょっと大切な物だから……

「そ、そつだつたんだ……勝手に取つていつてゴメンね」

私は「だつたら床に置いておくな」と言つやうになつたが、なんとか抑えた。頑張つたぞ、私。

「……そのや、わつき付いたんだけどその眼鏡つて度が入つてなによね？」

私がそつ質問すると、雲取くんは「うん」と冷静に答えた。

「やつぱお洒落田的なの？」

「いや、違うんだ」

雲取くんは少し口ひもつながら、何か躊躇つかのよつた仕草をしてから言った。

「……幼馴染のプレゼントなんだ」

「幼馴染……下校中に話した日向沢ノ峰霞（ひなたざわのみねかすみ）っていう人？」

「うん」

雲取くんは懐かしい思い出を語るかのように呟いていった。

「俺つてさ、顔に少しコンプレックスがあるんだ」

「顔？」

「うん、皆にはなぜか好評だったんだけど俺はこの顔が嫌いだつた。今でも嫌いだ」

雲取くんは本当に嫌そうな顔をしながら自分の頬つぺたを爪で引っ掻いていた。

「そんなときこそ、霞がこの眼鏡をわざわざ買ってくれたんだ」
そう言いながら、雲取くんは眼鏡を指差した。

「霞がコレを俺に渡しながら『コレならちょっと顔を隠すことが出来るんじゃない?』て言ってくれたんだ。最初は半信半疑だったんだけど、コレを着けて学校に登校してみたら周りが俺のことを気にしなくなつたんだよ。あの時はちょっと嬉しかつたなあ……」

雲取くんは天井を見ながら、感傷に浸っていた。

確かに雲取くんが今着けている眼鏡は大きくないとはいえ眼を覆うのには充分の代物だった。それに加えて雲取くんは前髪が長いのでもはや顔を確認するのは困難な状態となつていた。

「それからかな、俺がこの眼鏡に依存し始めたのは、今では怖くてこの眼鏡を着けてないと会話するどこのか眼も合わせられなくて困つたものだよ」

笑い事ではないはずなのに、なぜか雲取くんは笑っていた。

「…………苦労してるんだね」

「苦労なんてものじやない。ただ逃げてるだけ」

「だろうね」

「厳しいや」

私たちは静かに笑った。笑える話でもないのに、何かを埋めようと必死に笑った。

「…………一つお願いがあるんだ」

急に雲取くんが真剣な顔に変わったので、私も真剣に聞いてみることにした。

「俺さ、頑張って眼鏡無しでも他人の顔を見れるようになりたいんだ。もうこの眼鏡から……霞から卒業しないと」

だから、と雲取くんは続けて言った。

「俺と一緒に居て欲しい。そしていつの日か眼鏡を外した俺と視線を合わせて欲しい」

真っ直ぐと、眼鏡越しではあるものの私の目をハッキリと見ながら雲取くんは言った。

「…………それって愛の告白?」

私はその場を茶化すように言った。すると雲取くんは「俺変な事

「…」と頭に「？」を浮かべながら考へ、そして自分が何を言ったのか気付いて顔を真っ赤にさせた。

「い、いやいや違ひー。別に決してそういうつもりで言ったわけじゃないから…！」

「はいはい、どうぞしら私は馬鹿が嫌いだから。貴方の頭が良くなるまでは一緒に居てあげるわよ」

私は手をヒラヒラとせせながら言った。

「とりあえず服着なさい。サッサと勉強するわよ」

私がそう言つと、雲取くんは思つ出したかのように脱衣所に向かつていった。

どうやら自分が上半身裸だということを忘れていたようだ。

その後、しばらく勉強をしてから雲取くんは帰つていった。

雲取くんが帰るときまだ少し雨が降つていたのでもう少し小降りになつてからにすれば良いのではないかと尋ねたら「どうちにしろ雨の中帰るつもりだし家族が心配すると思うから」と言つてすぐに出で行つてしまつた。

私としては雲取くんと奈蔵（なべり）を遭遇させたくないの少し助かった。あの駄目弟だけは内緒にしておきたい。

「それにしてもコンプレックスか……」

私はそつ吐いてから、雲取くんの顔を思い出した。

「奈蔵みたいにカッコいいわけじゃないけど……それでも良い方だと思うんだけどなあ……」

私はそう呟いてから、リモコンを使って好きな番組にチャンネルを回した。

そのときの私はてっきり『雲取くんは顔が格好悪いからコンプレックスを感じている』と勘違いしていた。

雲取くんが覚悟を決めて私に本当の素顔を見せるまで、私はそう勘違いし続けたままだつた……。

第2話 『顔立つ』 月夜見莉亞視点

「雨凄いなー」

私こと月夜見莉亞（つぐよみりあ）は「ザア」と凄い勢いで振り続ける雨を見ながらボソリと呟いた。現在はとある理由によりクラスマイトの川苔（かわのり）の家で雨宿りをしている所だ。

「川苔ー！ 暇ー」

「暇なら帰ればいいじゃないか」

私が声をかけると、川苔は面倒くさそうな顔をしながら返事をしてきた。

「雨で歸れないから困ってるんじゃないかー。そんなんだから奈乃香（なのか）に振り向いてもらえないんだぞー」

「あ、赤久奈さんは関係ないだろつー？」

私が適当に嫌味を言つと、川苔は顔を赤くしながら叫んできた。分かりやすい奴だなー。

川苔が奈乃香……私の友達でもある赤久奈奈乃香に対して好意を向けてているのは私の通つている高校では一般常識となつていて、そして奈乃香が川苔に対して無関心なのは自然の摂理である。

ただ、私たちは眺めているだけだ。川苔が奈乃香に対して距離を縮めようとしている姿を「恋愛ドラマを観ている気分」程度に眺めている。

川苔を眺めていると、恋愛系のドラマが好きな人物の気持ちが少しだけ分かる。

「……何二二ヤーヤしてんだよ気持ち悪い」

「べつに。それでも今頃奈乃香は何して過ごしてるんだ
るつねー？」

「あ、赤久奈さんのことはびつでもいいしー? べ、別に興味ね
ーしー!」

私が二つやつてからかうと、川苔は決まって顔を赤くしながら否
定してくれる。その姿は何度見ても飽きない。

「それにしても川苔つて凄いよねー」

「あん? 何が?」

「奈乃香のこと好きだからさ」

「だ、だから好きじゃねーよー!」

今のは不可抗力である。決してからかおうと思つて言つたわけじ
ゃない。うん。

「それにしても人を好きになるつてどうこいつ」となんだろうね?..

「? 一体急にどうしたんだよ?」

「うーん、特に意味なんて無いよー」

私は地面に体を倒しながら言つた。すると川苔は「おかしな奴だ
な」と笑いながら返事をしてくれた。

私の目の前にいる人物には、好きな人が居る。
たまに、それがとても羨ましく思えるときがある。
私には、好きな人がいないから.....。
欲しいものが、何一つないから.....。

「うーん.....そろそろ帰るね」

私がやつ言いながら立ち上ると、川苔は先ほどと態度から一変して驚きながら「え？」と齒していた。

「いや、まだ雨凄いしもう少し止んでからにしたほうが……？」

「いって、それにお兄ちゃんに怒られるからやー」

「…………そつか」

川苔はなぜか残念そうな顔をしながら言つた。

「そんじゃ、傘貸すよ。気をつけて帰れよ」

「おう、川苔も気をつけて帰れよー」

「いやこじが俺の家だし」

私は川苔から二ホール傘を借りてせつせつと出て行つた。

雨は思つてはいる以上に降つており、やつぱりもう少し止んでから川苔ん家(ち)を出て行けばよかつたと何度も思つてしまつた。それでも出でてしまったものは仕方がないので、凄く強い雨の中を頑張つて歩き続けた。

「…………ん？」

そして家に向かつて歩いていると、同じ制服の男性が膝を床につけて必死に何かを探していた。

「眼鏡眼鏡…………」

まるでビームかの漫画のボケのように必死になつて眼鏡を探していった。

どうしようか、と考えているところへ、視界の端に一つの眼鏡を捉えた。

「あ、あのーすいませーん? もしかして眼鏡ってコレですか?」

私は地面に落ちていた眼鏡を拾つてから男性に声をかけた。すると男性は涙と鼻水で顔を汚しながらこちらを振り向いてきた。

「お、俺の眼鏡ええええ!!」

男性は私が握っていた眼鏡を瞬時に掴んでは着用しようとしていた。だが着用しようとした瞬間に男性は眼鏡に異変を感じたのかマジマジと見詰め始めた。

「眼鏡のレンズが割れると……」

男性の言葉に私は思わず「え?」と呟いてしまった。確かに良く見てみると眼鏡のレンズが割れていて着用すると危なそうだった。それに気付いた男性は肩をガクリと落としながら下に俯いてしまった。

「……まあレンズだつたら変えればいいか。それより見つけてくれてありがとう。大切な物なんだ」

男性は深々と私に対しても礼を言つてきた。恥ずかしくなつてきたので「別に平気だよ」と返事をしておいた。

「えっと……」のお礼は今度機会が会つたらちゃんと返すよ

男性は顔をタオルで拭き、私に向かつて……正確に言ひと私は視線を合わせなかつたのだが、それでもちゃんとした眼差しで言った。

「……ああ、やっぱ眼鏡がないと人の顔がちゃんと見れないな……『メン……』

男性は意味不明なことを言いながら早々に立ち去つてしまつた。去り際に顔を見たのだが恥ずかしかつたのか顔が赤くなつていた。

「……変な人だなー」

私は笑いながら男性が立ち去つていつた方向を見続けた。

「……それにしてもカッコ良かつたなあ……」

私は小さく呟いてから、雨の中を家に向かつて歩いていつた。雨の音以外に、心臓の音がドキドキと鳴つていた。その音は、恋に落ちた音と似てゐる感じがした……。

間章　『定着した日々の勉強』　三人称視点

6月の何日。放課後の教室ではいつもどおり赤久奈奈乃香（あかぐななか）と呼ばれる黒髪の少女は、雲取亘（くもとりわたる）と呼ばれる眼鏡を着用している校内一の馬鹿少年の勉強を見てあげている。

この勉強は、今ではお互いにひとつには『朝起きたら顔を洗う』程度に習慣に身についており、片時もこの勉強の出来事を忘れたことはないだろう。

それゆえか、雲取の知識は日々上昇している。

「うん、この公式も完璧にマスターしたわね」

「うん、これも赤久奈さんのおかげだよ」

雲取がお礼の言葉を言つと、赤久奈は「雲取くんの実力だよ」と謙遜しながら照れた。

日々を重ねるごとに知識が増えていくので今の雲取はもはや学校一の馬鹿ではなくなつていて。しかしそれを証明するためのシステムでもある定期考查は7月にある。それまで雲取の実力は明かされず、記録上では最下位となつている。

「いやー、早く定期考查が来て欲しいと思う日が来るだなんて思つてもいなかつたよ」

コレが今の雲取の口癖だつた。赤久奈に勉強を教えてもらうまでも雲取にとつて定期考查とは『自分の寿命を縮める首吊りの紐』という意味不明な認識をしていたのだが、今では小さな子供がゲームの発売日を楽しみにする感覚で待ち望んでいた。

「はは、まだ定期考査まで時間はありますわねー」

赤久奈はそんな雲取の口癖に対して笑いながら返事をした。

「それまではしっかりと勉強して、いい成績を取ろうね」

「おう」

赤久奈が小さくガツツポーズをすると、雲取もそれに同調して小さくガツツポーズをした。

そしてその後は黙々と勉強をし続けた。

このとき、赤久奈は次の日もいつも教室に残つて勉強するのだろうと信じて疑わなかつた。

だからこそ、翌日に雲取が学校を休んだときは驚きはしなかつたものの戸惑つたのは無理もないだらつ。

第3話？『訪問』 赤久奈奈乃香視点

6月の日頃。いつもどおり、私こと赤久奈奈乃香（あかぐななのか）は朝のH.Rが始まる前に自分の教室に入り席に着いた。

「おはよー奈乃香」

「おおおおはよう赤久奈乃香！」

席に座るなり友人の月夜見莉亞（つくよみりあ）こと莉亞と、川苔陽平（かわのりょうへい）こと川苔くんの二人が挨拶をしてきたので、私も「おはよー」と返事をした。

そこで私はつい雲取（くもとり）くんの席を見てしまった。
まだ登校していないのか、雲取くんの席には鞄すら見当たらなかつた。

珍しいな、と私は思ってしまった。

雲取くんは以外と早起きらしくて、勉強で分からぬ所を先生に質問するために早めに登校しているのだと前に聞いたことがあった。だから今日も早めに登校しているのかと思ったが、今日はそうでもなかつたらしい。

「どうしたのー？」

莉亞が不思議そうな顔をしながら私のことを見てきたので私は「なんでもないよー」と適当に答えた。

そして学校のチャイムが鳴り響き、私たちのクラスの担任である長尾丸（ながおまる）先生が教室に入ってきた。

「あー……お前らサッサと座れー」

長尾丸先生はやる気無れやつて呟つた。

「やつべー」

莉亞と三姫くんはそつ啖きながらそれの席に座つていつた。

「あー……えつと、これから朝の連絡をいつべー」

長尾丸先生はやはりやる気無れやつて周囲を見渡し、全員が席に座つたのを確認すると同時に喋り始めた。

「えー……今日は雲取が休みだ」

「…………え？」

長尾丸先生が何のためらいもなく言った一言に、私は反応してしまった。

「なんでも風邪を引いたらしい。お前らも元氣よく風邪引けよ。
そうすれば学級閉鎖で休め……あー今のなし聞かなかつたことにし
ろ。うん、子供は元氣が一番」

わすが駄目教師ツ！ 自分が休むことしか頭に入つてないッ！

皆の心が一瞬だが一つになつた気がした。

それにしても『元氣よく風邪引けよ』はわすがに無いと思つよ長尾丸先生……。

……それにしても雲取くん風邪か……。

私はそう思いながら、窓の外をジッと眺めていた。
今日は快晴だ。

そして時間は過ぎていき、放課後の時間となつた。

「奈乃香、早く帰ろつー」

「うん、ちよつと待つてー」

私は鞄の中に筆記用具等といった道具を詰め込み、帰り支度を終えようとしていた。今日は雲取くんがいないので必然的に放課後の勉強会は休みになる。よつて莉亞と一緒に帰れることになる。

「よし、準備オッケー。そんじゃ帰ろつか」

「うん、今日は帰りにパフェ買おうぜー」

私は莉亞とそんな世間話をしながら教室を出て行つた。だが途中で長尾丸先生に「ああ、ちよつと待て」と肩を掴まれてしまつた。

「？ なんですか先生？」

「あー……お前雲取の家がどこにあるのか知つてるよな？」

「？ ええ、知つてますよ」

長尾丸先生がそう質問してきたので、私はイエスと答えた。

「だつたらこのプリントを渡しておいてくれないか？ 重要なプリントだからちゃんと届けて欲しいんだ」

長尾丸先生はそう言いながら私にプリントを押し付けてきた。

「えー！ そんなの先生が直接行けばいいじゃーん」

「先生は忙しいんだ」

私の横にいた莉亞が講義をしたが、長尾丸先生は軽く流した。

「そんじや、頼むぞ」

長尾丸先生はそう言い残し、素早く去っていった。その姿はまさに『脱兎の如く』だつた。

「まつたく、別に急ぎじゃないんだから今日じゃなくともいいじゃないかー」

「そうだね、まあ先生の方にも用事があるんだから仕方がないよ

横で文句を言つてゐる莉亞に対して私は易しく言つた。

「じゃあ今日はパフュは無しかなー？」

莉亞は少し残念そうな顔をしながら言つた。

「ゴメンね、また今度時間を作るよ」

「いいって、別に奈乃香が悪いわけじゃないんだし」

私が謝ると、莉亞は全く気にした雰囲気を出さずこぼしてくれた。

「そんじや、サッサと雲取ん家（ち）に行きますか

「うん」

そういう経緯で、私たちはパフュを食べるのを諦めて雲取くんの

家に向かうことになつた。

そして下駄箱まで歩いていくと、今まで革靴に履き替えていた川苔くんと本田（ほにた）くんと遭遇した。

「お、川苔に本田じゃないか。ヤッホー」

莉亞は一人の姿を視界に入れなり、すぐさま声をかけた。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

「あ、赤久奈（あかぐな）さんに月夜見（つくよみ）さんじゃな
いか」

「おおー、赤久奈さんー！……げつ！？ 月夜見じやん……」

本仁田（ほにた）くんと川苔（かわのり）くんもこちらに気がつ
き返事をしてくれた。なぜか川苔くんは莉亞を見るなり嫌そうな顔
をしていた。

「おいつ、お前今明らかに『面倒くせー奴に出会つちまつた』で
顔したな川苔ー」

莉亞も川苔くんの嫌そうな顔に気が付いたのか文句を言つた。

「実際に面倒な奴に出会つちまつたんだからいいだろそれぐらい
言つたつて」

「なんだとーー！？」

川苔くんが顔を逸らしながら言つて、莉亞は「ふんすかつ」と怒
りながらポカポカと可愛らしい擬音が聞こえそうなパンチを繰り出
していた。

私はそんな一人を無視して本仁田くんと話すことになった。

「今から帰るとーいり？」

「おお、そのまま家に真っ直ぐ帰るところだつたよ」

「そう、今から雲取くんの家にお見舞いに行くんだけど本仁田く
んはどうする？」

私がそつ尋ねると、本「田くんは「つーん」とうなりながら考え始めた。

「「メン、今日は用事があるからバスするわ。雲取によろしく言っておいてくれない？」

「そう、わかつたわ」

私がそつ返事すると、本当に用事があつたのか本「田くんは「やんじや」と言つてすぐにその場から立ち去つてしまつた。

「だいたい川苔はチキンなんだよーー。そんなんだから好きな子が振り向いてくれないんだぞーー！」

「そ、それは関係ないだろーー？」

後ろを振り返つてみると、現在進行形で莉亞と川苔くんが口喧嘩を続けていた。

「ちよつといい加減にしなよ」

流石にそろそろ目立ちちそつになつてきたので、私は無理矢理一人の間に割つて入り口喧嘩を強制的に止めさせた。

「ところでも、川苔くんつてこれから用事ある？」

「え？ あ、まあ用事はないけど……」

いきなり話題を振つてしまつたためか、川苔くんは少しうつむいたえながら、それでもしつかりと答えてくれた。

「これから雲取くんの家にお見舞いに行くんだけどどうすむ？
一緒に行く？」

「あ、あーそういうことば休んでたなアイツ。どうすりかなかー……」

川苔くんは頭をポリポリと搔きながらじうするかを考えていた。
そして何かに気付いたらしい表情をしながら私のことを真剣な目で
見てきた。

「……赤久奈さんも一緒に行くのか？」

「？まあ勿論行くわよ、先生に頼まれたし」

「だつたら行くぜっ！…」

川苔くんはなぜかテンションを高くしながら答えてくれた。
一緒に来てくれるのは嬉しいのだけれど、なぜそんなにテンションを上げるのだろうか？

「おやおやあ？」「ノンノンでもしかして私はお邪魔ですかなあ？」

なぜか莉亞は何か企んでいる顔をしながら私と川苔くんのことを見てきた。私が「どういう意味？」と尋ねようとしたらい切れまたなぜか川苔くんが顔を赤くしながら叫び始めた。

「べ、別に邪魔じゃねーよっ！？ 赤久奈さんと一緒に帰れて嬉しいわけじゃねーしつ！？」

「あ、じゃあ私がいてもこよねー。むつふつふー、残念だつたねー川苔。せつかく奈乃香と一人つきりで帰れるチャンスを棒に振るなんてさー」

「だ、から違うつづーの！？ 僕は雲取のことが心配なだけで赤久奈さんと一緒に帰りたかったわけじゃないつづーの…！」

「まあそういうことにしておこうかなー？」

莉亞は意味深な顔をしながら「ニヤハハ」と笑っていた。

……「じつやう」の場で話に着いていけないのは私だけみたいだつた。

私は一人の会話が終わるまで「？」を浮かべていた。

「うして、私と莉亞と川苔くんは現在進行形で雲取くんの家に向かつて歩いていた。

時々、川苔くんが車道側に歩いてくれたり小石を除けてくれたりして「優しいんだなー」と思っていたが、流石に何回もやってもらうと「ウザいなー」と思ってきてしまうのは仕方がないと思つ。そもそも自分の周りをグルグル回られている時点でなんかウザかった。

「あ、そういうばこにだつけかなー？」

「え？ 何が？」

突然、莉亞が道路の真ん中で立ち止まって咳き始めた。

「ここにすつじくカツコイイ男の子がいたんだよ。制服からしてウチの学校の生徒なんだろうけどとにかくカツコ良かつたんだよなー」

莉亞が何の前触れもなくそう言つので、私は「へー」と相槌を打つしか出来なかつた。興味がないと言えば嘘になるが、それでもあまり心がそそられることはなかつた。

「そいつのバッジの色は？」

川苔くんは今の莉亞の話に興味を持ったのか質問していた。

私が通う山多摩（やまたま）高校の生徒は学年を分かりやすくす

るため胸に着けるバッジの色が学年ごとに違っている。

おそらく川苔くんは学年が分かれればある程度誰なのか田星がつく
だろうと考えたのだろう。

探す気満々だった。

「うーんと…… そのとき園だったからなー、確か銀色? だった
かなー?」

莉亜は少し迷いながら答えた。銀色と云ふと私たちと同じ一年生
を指して云ふことになる。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

「ん……俺たちと同じ学年でカツコイイ奴つて沢山いるよな。鹿倉（むかう）とか向一とか川苔（かわのり）とか川苔とか……」

川苔くんは「うーん」とうねりながら山多摩（やまたま）高校に在学中のカツコイイ生徒の名前を言つていつた。ただなぜか川苔くんの名前が連呼していた気がするが、まあ氣のせいだらう。言つほどカツコイ良くないもん川苔くん。

「いや、多分違うと思うよ。私がこの間出会った人は眼鏡をかけてたんだけど……鹿倉くんと向つて眼鏡持つてないでしょ？」

川苔がある程度の名前を言い終えたのを見計らつて（ちなみに川苔くんは最後のほうは全部『川苔』と連呼していた）莉亞が思い出したかのように言つた。

「ふうん、そいつ眼鏡してんだ……んじゃあ違つか。そもそもを言つたらやつと向の奴は眼鏡嫌いだしな」

川苔くんは「振り出しか……」と残念そうに呟きながらもう一度カツコイイ人物を思い出していた。

そんなことをしてこるついでに雲取（くもとり）くんの家の前まで辿り着いていた。

とりあえずその謎のカツコイイ人物の話はまた今度になつた。

「へえ、結構良い所に住んでんだな」

「そうだね、コレは立派だ」

川苔くんと莉亞が日々に素晴らしいと言い始めた。

私も確かに素晴らしいと思っていたが、別に口に出してまで言つことではなかつた。

実を言つと5月の間に私は一度だけ雲取くんの家に訪れていたのだ。住所を知つていたのもその為である。

そのときは妹さんがいないといつことで雲取くんの家で勉強することになつたのだ。

ただ、それも一度きりの話でありそれ以来は訪れていなかつた。それに雲取くんは結局のところリビングまでしか案内してくれなかつたのであまり詳しくはなかつた。

「ようし、インター ホン押すよー」

私が懐かしい思い出に浸つていると、いつの間にか莉亞と川苔くんは玄関前に入つておりインター ホンを押そうとしていた。
……相変わらず行動が早いな。

「なあ、一体誰が出ると思つよ?」

「ん~、私は妹さんが出るに肉一枚」

「そんじや、俺はお姉さんが出るに肉一枚だ」

私が急いで玄関前に追いつくと、二人は暢気に賭け事をしていた。

「よし、その約束忘れるなよ?」

「望むところだ」

二人は互いに確認を取つてから、そして莉亞がインター ホンを押した。

『ピーンポーン』とこうどこの家庭でも聞けるインター ホンの音が

小さく聞こえ、間もなく『トコトコ』と家中で誰かが歩いている
だらう音が小さく聞こえてきた。

『はー？ ベル様ですか？』

「あ、私は雲と……亘（わたる）くんのクラスメイトの赤久奈奈
乃香（あかぐななか）と申します。お見舞いにきました」

ドアの向こう側から声が聞こえてきたので、私はなるべく礼儀正
しく接した。一瞬「雲取くん」と言いつになつたが、よく考えた
らこのドアの向こうにいる誰かも「雲取さん」なので改めて下の名
前を言った。

「私の名前はクラスメイトの田夜見莉亜（つくよみりあ）でーす
！」

「お、俺は先ほど名乗っていた赤久奈さんのクラスメイトの川苔
陽平（かわのりょうへい）です！」

私の後ろにいた莉亜と川苔くんも田口紹介をした。

『…………』

なぜか沈黙がその場を支配した。

てつくり“ドアを開けてもいい”という示唆なのかと思ってドア
ノブを掴んでみたが、やはりというか聞く気配がなかつた。

「あ、あのー！ 私は亘（わたる）くんのクラスメイトの赤久奈
奈乃香と言います！ お見舞いに来ました！」

私は念のため今度は大きな声で言った。

そして数秒後に返事が返ってきた。

『…………証拠』

「え？」

『お兄ちゃんのクラスメイトだとこう証拠を語り合へださー』

「「「…………」「」」

ドアの向い側にいる誰かの返事を聞いて、私は勿論後ろにいた莉亞と川苔くんも「コイツ面倒くせー」とこう顔をした。

「……おーい、とりあえずそのお兄ちゃんに関係のあることを言えばいいのか?」

川苔くんが確認のため質問すると、数秒後に『はい』と今にも消え入りそうな声で返事が返ってきた。

「なんか用心深いといつか面倒くさい子だね」

莉亞は苦笑いをしながら言った。

「まあ雲取に関係ある」とを適当に言えばいいんだが? ひとつと書つちまおうぜ? セしてお姉さんだったら肉だぞ莉亞? 「.

「それはこっちの口調だよ川苔? もし妹さんだったら肉だよ?」

川苔くんと莉亞は再び確認するように言った。

というよつ本当に賭け事をする気なのだらうかこの一人は?

「やんじや、皿ついだ」

川苔くんの合図と共に、私たちは息を静かに吸い、そして吐き出

「あよひに言つた。

「雲取くんは数学のテストで赤点以外取つたことがない」

「雲取の好きな教科は古典」

「雲取の好物はオムライス」

順に私、莉亞、川苔くんである。

……言つた後から気付いたけど流石にコレだけの情報量じゃ証拠にならないよね、うん。

仕方がないのでもう一度ちゃんと証拠になりそうな事を言つて

ガチャツ。

ドアの鍵が開く音が聞こえてきた。

……本当に用心深いのか面倒くさいのか、それとも適切なのか分からぬい門番である。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

ドアが開き、家中から可愛らしい黒髪ポニー・テールの女の子が現ってきた。

「……」「んにちは」

「んにちは」

ポニー・テールの女の子が少し躊躇いながらも挨拶をしてきたので、私はニッコリと笑いながら返事をした。

「よしー、妹確定だね！」

「ま、待てよ！？ まだ妹だと決まってねえ！？ 非実在青少年

かもしれないぞ！？」

「そんなのいるわけねえ」

後ろではまだ莉亞（りあ）と川苔（かわのじ）くんが賭け事をしていた。諦めが悪いな川苔くん。

「えつと……」「わたるくんの妹さんかな？」

「はい、妹の雲取三花（くもとりみつか）と言います」

私が優しく質問すると、三花と名乗ったポニー・テールの女の子が答えてくれた。私の後ろで「そんな馬鹿な……」とか「いやつほーい！」とつるさい声が聞こえてきたがとりあえず無視しておいた。

「じゃれ、亘くんに渡しておいてくれないかな？」

私は鞄の中から長尾丸（ながおまる）先生に頼まれていたプリン

トを取り出しつつ三花ちゃんに渡した。

「ありがとうございます。……あの、もしかつたりお兄ちゃんに少し会つてこれますか？」

「え？　いいの？」

私が尋ねると、三花ちゃんは「はー」と答えてくれた。

「んじゃ、お邪魔するね。……一人ともここ加減にしなよ」

なぜか取つ組み合ひになつていた莉亞と川音くんの頭を「シンシン」と叩いて雲取くんの家に入つていった。
そして順に三花ちゃん、私、莉亞と家の中に入つてしまい、残つた川音くんも家の中に入り口とした。

「あ、ちょっと待つてくれだせこ」

ちゅうど三音くんが入るのをした瞬間、なぜか三花ちゃんは呼び止めていた。

「ん？　俺がどうかしたの？」

「貴方は入っちゃ駄目ですか」

「え？　なぜ？」

「お兄ちゃんの好物はオムライスじゃなくて私が作ったハンバーグです」

三花ちゃんはまめつぱつて、何の躊躇にもなくドアと閉じ鍵をかけた。

「え？　いやちょっと待つよわたしのあれの事…？　いやでも

や、アイシの間『俺ってオムライス好きなんだよねー、でも卵割るとヒロさん死んじゃつから食べれないんだよねー?』って言つてたんだけど!?

川苔くんが必死になつて弁論していた。『とにかく可愛いな雲取くん。意外とピュアだな。でも『卵割るとヒロさん死んじゃつから食べれないんだよねー?』はハツキリ言つてキモい。『お前は女子か!? ビジで女子力を溜めてたんだ!?』と突つ込みたくなつてきた。

「お、お兄ちゃんはこの間『三花が作ったハンバーグは美味しいなあ、宇宙一だよ』って褒めてくれたもん!」

三花ちゃんはなぜか顔を赤らめがならドアの向いの側にいる川苔くんに対して叫んだ。うん、多分それはお世辞だよ三花ちゃん。

「他にお兄ちゃんの知つてることを言えれば開けますよ」「うへん……知つてることつてもうないんだけど……」

ドアの向いの側にいるので確認できないが、時折「うへん……」「うねつて」という声が聞こえてくるのでビクビク震えるだけ考えているらしい。

「雲取の口本の隠し場所はベッドの下」

……聞いた後から気付いたけど流石にソレだけの情報量じゃ証拠にならないよね、うん。ところが三花ちゃんがそんなこと知つてゐるわけないじやない川苔の馬鹿。

仕方がないのでもう一度ちゃんと証拠になりそうな事を言わせて

ガチャツ。

ドアの鍵が開く音が聞こえてきた。

本当に用心深いのか面倒くさいのか、それとも適切なのか分からない門番である。

いや、それ以前になんと雪取くんの戸口本の隠し場所知ってるの三花ちゃんー？

「……なんでお兄ちゃんの戸口本の隠し場所を知っているんですか？」

三花ちゃんが驚いたといつよつ疑惑の眼差しで川苔くんの口とを見つめた。

「いや、口の間教えてもらひたから……？」

川苔くんは少しうらたえながら、眼を泳がせながら答えた。口の様子だと泣いちゃうほどの言ひたよつだ。そもそもを言ひかけうとベッドの下に戸口本隠すのって王道過激に逆に誰もやらないもんな、多分。

「そりへ……まあ知つてたから一応通す」

三花ちゃんは少し偉そうな態度をとしながらドアを開けて川苔くんを家中に入れてあげた。

「……お兄ちゃんは、妹物の戸口本を貰つてくれないんですね……

三花ちひやんは少し寂しそうな雰囲気を醸し出しながらボソリと呟いた。

……いや、いくらなんでもリアル妹がいるのに妹物のH口本は買えないでしょ。

「ムツフツフー。これは部屋に入つてからの楽しみが出来ましたなー」

莉亜が少し悪そうな顔をしながら言った。探す気満々である。

「それにしてもアイツってH口本買つんだ……ちょっと以外」

川苔くんは少し拍子抜けした顔をしながら言った。確かに川苔くんの言うとおり雲取くんってエロ本とか買つてそうなイメージが無かつたのでちょっと意外性を感じた。

「人は見かけによらないってことね……」

私も少し顔を熱くさせながら呟いた。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

「それではお兄ちゃんの部屋に案内しますね。着いてきてください」

三花（みつか）ちゃんはさつまつとわたくせと階段を上り始めた。私たちもその後を着いていった。

「ここがお兄ちゃんの部屋です」

階段を上つてすぐ近くに雲取（くもとり）くんの部屋があった。三花ちゃんは雲取くんの部屋の前に近づいてドアを「コンコンッ」とノックした。するとドアの向こう側から「はーい」と今にも消え入りそうな弱弱しい雲取くんの声が聞こえてきた。

「お兄ちゃん。お兄ちゃんの同じクラスの女性が一人と変な男一人がお見舞いに来てくれたよー」

「ちよ、変な奴って俺のことかよ！？」

「あー、どうぞ」

三花ちゃんは川苔（かわのつ）くんの突つ込みを無視してドアを開けた。

部屋の中は意外と整理されており生活感を漂わせていた。青色が好きなのか全体的に青い物が多く置かれていた。

「えつと……ああ、赤久奈（あかぐな）さんと月夜見（つくよみ）さんに川苔くん。わざわざお見舞いに来てくれてありがとう」

ベッドの上には雲取くんが顔を赤くさせながら横になっていた。

お世辞にもあまり顔色が良いとは言えなかつた。それでもなぜか眼鏡だけはしっかりと着用していた。

「それじゃ、私は失礼します」

三花ちゃんは私たちにそう言ってから部屋を出てドアを閉じた。私たちに気を使つてくれたのかもしれない。小さいのに出来た子だ。

「えつと……なんて言えばいいのかな？　あまり友達が家に来るのには慣れて無くつてさ、はは」

雲取くんは少し笑いながら言つた。その表情は少し嬉しそうにも見えた。

「な、なあ雲取……体調はどうなんだ？」

「ああ、ちょっと風邪を拗らせただけだから大丈夫だよ。明日には学校に行ける」

川苔くんが心配そうに質問するも、雲取くんは本当に大丈夫そうに笑いながら言つてくれた。

「そう、よかつた……」

少なくとも笑えるつてことは心に余裕があるということだ。私も雲取くんの笑顔を見て少し落ち着いた。

「ところで何か急ぎの用事もあるの？　普通だったら一日休んだぐらいで見舞いに来ないよね？」

雲取くんはどこか不思議な表情を含ませながら言つた。そうだ、

当初の目的を達成させなければここに来た意味がない。

「長尾丸（ながおまる）先生にプリントを渡すよ」ついに頼まれていたのよ

「雲取のベッドの下にあるH口本を物色するために来たんだよー」

「まあ暇つぶし?」

順に私、莉亞、川苔くんと書いた。

……言つたはいこがなぜいつも見事に目的が別れてくるのだろうか？ 私たちは一つの目的を共有してここにまだ来たはずなのに何いで過ちを犯してしまったのだろうか？

「ちよつと待つて月夜見やん、なんで俺のベッドの下にH口本をあぬじと知つてるの？」

よつこもよつて雲取くんは莉亞の言葉に反応した。……本当にベッドの下に口本隠してんのかよ？

「いや、わつわい花ちゃんがそつと書つてたよ?」

「……あの野郎また勝手に見てこやがつたな……」

雲取くんが口本まで見せたことが無い鬼の形相をしていた。思わず「エクリツ」と驚いてしまった。

「つてなわけで拝見するよー」

莉亞はそんな雲取くんのことを華麗に無視して向の躊躇にもなくベッドの下に手を伸ばした。

「お、発見ー ジれどれ……？」

「わーっ！？ 読んでんじゃねえよっ！？」

莉亞が本を片手に握り読み始めようとした瞬間、雲取くんは元々赤い顔をさらりと真っ赤にさせながら本を奪い取つては布団の中に隠していった。

「えー？ いいじゃーん別に減るもんじゃないしー？」

「は、恥ずかしいんだよこいつちは！？」

莉亞は「ふーぶー」と言しながら講義したが、雲取くんは顔を真っ赤にさせながら反論してきた。

……私も雲取くんがどんなH口本を読んでいるのかちょっと気になるんだけどな……。

「ふむふむ、お前つて意外と年上が好みなんだな」

川苔くんが突然独り言を言い始めたので何事かと振り向いてみると、いつの間にかゆっくりとH口本を読んでいた。

「あーっ！？ そ、それは勘弁してくれーーー！」

「おーい月夜見、読むか？」

「読む読むー」

「回してんじゃねえよっ！？」

雲取くんはとても病人とは思えない動きを繰り出し川苔くんの手からH口本を奪い取つてはすぐさま先ほどのH口本同様布団の中に隠していった。

「ふつ、まあお前が巨乳好きだという事実は隠しといてやるよ。男と男の約束だ」

「わーっ！」

「女子がいる前で叫びやがってるよ川苔くん！？」

雲取くんの言つとおり、川苔くんが言つた『男の約束』は私と莉亞の耳の中にしつかりと刻まれた。

「……雲取くんって巨乳が好きなんだ」

そして私は自分の平らな胸を眺めた。
……少し泣きそうになつた。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

その後、適当に駄弁つてこるとドアが「ノンノンナ」と鳴った。

「お兄ちゃん、入つても平氣？」

「おお、いいぞー」

雲取（くもとつ）くんが「ひづれ」と、ドアが開いて三花（みつか）ちゃんが部屋に入ってきた。

「これ、リング剥けたよ」

三花ちゃんは両手で皿を持ちながら雲取くんに突きつけるかのように見せた。皿の上には皮が綺麗に剥けられ何等分かに分けられているリング「ゴ」が置いてあった。

「へえ、上手いね。三花ちゃんが剥いたの？」

「は、はい……」

私がリング「ゴ」を見ながら褒めると、三花ちゃんは可愛らしく顔を紅潮させた。

「姉さんの分もあるからどうぞ」

三花ちゃんはそう言いながらリング「ゴ」が乗っかつて皿を机の上に置いた。

「え？ 私たちも食べていいの？」

「はい、少しあめに剥いてきたので大丈夫ですよ」

私が素朴な質問をすると、三花ちゃんは笑いながら答えてくれた。

「いやー、でもやっぱ果物は病人が食つべきものであつて私たちが食つべきものじゃないと思つんだよねー」

莉亞（りあ）は「ムシャムシャ」とリンゴを齧りながら言った。
……既にリンゴを食べている時点で説得力ないよ。

「おい月夜見（つきよみ）。ここの雲取の家なんだからもつと禮儀を知れよ。このリンゴを先に食べて良いのは雲取だぞ？」

川苔（かわのり）くんも「ムシャムシャ」とリンゴを齧りながら言った。

……だからリンゴを食べている時点で説得力ねえつづの。

「川苔だつて食べてんじやん」

「お前が食つたから食つていいんだ。お前が食つてなかつたら俺も食つてなかつた」

「あー、男の癖に酷い言い訳ー。人のせいにすんなよー」

「元はと言えばお前が先にリンゴを食べたのが悪いんだらうが?」

一人は口にリンゴを銜えながら口喧嘩をし始めた。一人の喧嘩がヒートアップする度にリンゴはどんどんと減つていぐ。

なんだこいつらは？ リンゴという栄養を摂取しないと喧嘩できないのか？ いや、この場合はリンゴがあるから喧嘩が起きてしまつたのだろう。そもそもこのリンゴは三花ちゃんが雲取くんのために剥いてきたものであつて私たちの物ではないということを分かつているのだろうか？

「あ……」

三花ちゃんが咳きを漏らしていた。無理もないだろう。なにせ沢山あったリンゴがこの馬鹿一人のせいで跡形も無く消え去ってしまったのだから。

「だいたいお前は

「

「それにしてもアンタは

「

川崎くんと莉畑は次のリンゴを口に含もうと目に手を伸ばした。そこでやつとのことで自分たちだけでリンゴを食っていたことに気がついたらしい。

「…………」「

二人ともなにか気まずそうにしながら沈黙。それも当然だら、なんせ雲取くんが食べるはずのリンゴを全て自分たちで食べつくしてしまったのだから気まずい程度じゃないだろう。

「「えっとその……すみません」」

川崎くんと莉畑は一斉に土下座した。

「あ、あの……もう一度剥いてきますから大丈夫ですよ」

三花ちゃんはさう言いながら空になつた皿を掴んで部屋を出て行こうとした。

「ま、待つて三花ちゃん！？ 私たちもリンゴ剥くの手伝つよー。」「そ、そうだ！ 元々は俺たちが悪いんだ！ それぐらいはさせてくれー！」

「え、いやでもお客様だし悪いですよ……」

莉亞と川苔くんは自分の罪滅ぼしのためか三花ちゃんと一緒にリンゴを剥いて部屋に出て行こうとしていたが、三花ちゃんはそれを拒否した。

「こ、こやでも本来は雲取が食べるはずだったリンゴを俺たちだけで食つちまつたのも一つの事実だし、やつぱり俺たちが働かないとなー！」

「そ、せうだよー むしろ三花ちゃんほいこで待つていてくれてもいいぐらいだよー！」

川苔くんと莉亞はそれでも一步引かなかつた。その一人を見て三花ちゃんは「一体どうすればいいのだろうか?」と言ひたげな顔をしながら困ついていた。

「三花、俺ちょっとお粥が食いたいな。悪いけど月夜見さんと三苔くんに手伝つてもらいながら作つてくれないか?」

私が一人に対して「いい加減にしなよ」と言おうとした瞬間、雲取くんがお腹を擦りながら三花ちゃんに対してもう一回言つた。

「……お兄ちゃんがそう言つんだったり」

三花ちゃんはなぜか顔を赤くさせながらモジモジと何か呟いた。

「えつと……月夜見さんに川苔さんでしたっけ？ その、一緒にお粥を作つてくれますか？」

三花ちゃんが少し恥ずかしそうに言つと、一人は「オーケイオー

ケイー」と囁びながら」承した。

「よし、そんじゃ早速会所に行ひつか

莉亞が三花ちゃんの小さい手を握りながらそのまま部屋を出て行つた。川崎くんもその後に続く形で部屋を出て行つた。

「わちがお兄ちゃん。妹の扱い方を心得ているね」

私がそつ茶化すと、雲取くんは「そつでもなこと」と謙遜してきました。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

「…………本当にありがとうね
「ん？ なにが？」

雲取（くもとり）くんが急にお礼を言つてきた。だが何に対しても言つたのか分からなかつたため私の返事は質問形となつてしまつた。

「お見舞いのことだよ」
「ああ、別に良いのに」

私は手をブラブラさせながら適当に言つた。

「……今一人きりだから聞くんだけど、赤久奈（あかぐな）さんは好きな人とかいるの？」
「…………ツ！？ ゲホゲホツ！？」

雲取くんが突然にも程があることを急に言つたため、私は咳き込んでしまつた。

「い、いきなりなに変なことを言つたのよー？」
「うーん……何と無く」
「何と無くってどうこいつ意味よ……？」

雲取くんは本当に何と無く……何の考えもなしに言つたようでとぼけた顔をしていた。その顔を見ていたらなんだか取り乱して咳き込んでしまつた自分が馬鹿馬鹿しく思えてきた。こういう恋愛話にも免疫をつけないといけないかもしない。

「んー……好きな人はいないわね。私そういうの苦手だから」「わあ、以外だ。赤久奈さんだったら誰か好きな人がいると思うてたよ」

私の返事を聞いた雲取くんは少し驚いていた。

「私そういう恋愛感情って苦手なのよねー。友愛と恋愛の違いがよく分かんないのよ」

私は頬を搔きながら言った。

実際に、私は生まれてからずつと勉強しかしていなかつたため恋愛感情には乏しかつた。友達がよく「私　くんのことが好きなのー」とか笑いながら話しているが、そのときだけ私は会話の流れを掘むことができなかつた。

「ふうん、赤久奈さんでも分からぬことつてあるんだ」

雲取くんは少し意外そうな顔をしながら呟いていた。

「そういう雲取くんは好きな人がいるの？」

逆に私は雲取くんに対して質問した。雲取くんのほうから話題を振ってきたのである程度好きな人がいるのは間違いないだろう。

「いんや、特には」

だから雲取くんがこう答えたとき、私は純粹に驚いた。

「自分から話題振つておいてそれはないんじゃないのかなー?」「えー……。だつて好きな人とかいないもん」

試しに茶化してみるが、本当に好きな人がいないのか雲取くんは「つづむ……」とうねり始めてしまった。

「あ！　この間雨に田に話していた日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）っていう人はどうなの？」

私は突然頭に思い浮かんだ、この間雲取くんが話していた幼馴染の名前を挙げてみた。

私としては軽いノリで言つたつもりだつた。だからこそ、雲取くんが急に珠のよくな汗を流し始めたことに驚いた。

「ちよ、雲取くん！？ 大丈夫！？」

私は雲取くんの額に浮かんでいる汗を見て声をかけた。体調が悪いのかと思つたけど雲取くんは「大丈夫だから」と言いながら近くに置いてあつたタオルで汗を拭いた。

「それにしても霞か……確かに好きかもしれないね」

雲取くんは一通り汗を拭いてから私の質問に答えてくれた。

雲取くんがその霞つていう人に対して「好き」だと言つた瞬間、なぜか私の胸がチクリと痛くなつたのを感じた。

奇妙に思いながら胸を触つてみると特に何も無い。気のせいだろうか？

「だ、だつたら付き合つちゃえば？」

そして私はなぜかそんなことを言つていた。なぜかそう言いたい

「気分になっていた。

「だけど俺には霞を好きになつたりやこけない理由があるから……」

「理由って？」

「『メン、これもこの間同様口止めされてる……んだけだとえ口止めされていなくとも言つてなかつたと思つよ』

雲取くんは少し表情を曇らせながら、それでも言つた。

「それじゃ、もしその理由が無かつたら付き合つてたの？」

「…………」

私はまるで攻めるかのように雲取くんに言い放つてしまつた。これは不味いと自分で思いすぐに謝るつと霞も俺のことを好きだつた

しながらもなぜか穏やかな顔をしながら私のことを見ていた。

「…………やうだね、別に理由が無くても付き合わなかつたかもしれないね」

雲取くんは私が何を言つたのか察していふのによつて言つた。

「幼馴染つていうのは距離が近すぎる分恋愛感情つてのが曖昧になるんだよねー。結局、俺は勿論きっと霞も俺のことを好きだつたんだけ付き合おうとは思つていないよ。今頃霞は誰かと付き合つているに違ひないよ」

「…………それってなんだか悲しくない？　例え付き合おうと思わなかつたとしても、自分が好きだった子が他の男の子に取られるのって、どういう気分なの？」

「…………ちょっと、寂しかつた」

雲取くんは、そつは言つたもののなぜかちつとも寂しそうな顔をしていなかつた。むしろ清清しい顔だつた。だが別に嘘を吐いていはわけないと感じた。本当に寂しいと思つてゐるのだが、それ以上に別の感情が勝つてゐるのだろう。

「でもさ、霞の幸せは霞の物であり、霞の自由だ。俺の我慢で奪い取つていいものではない」

雲取くんは本当にその霞さんの幸せを祝福してゐるかのように言った。きっと、寂しいと感じる以上に嬉しいと感じてゐるのだろう。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点（後書き）

一応書いておきますが、日向沢ノ峰靈といつのは【第2話？『顔立ち』】で名前だけ出た人物です

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

「俺はまだ、恋愛感情を知らない子供だから」

雲取（くもとり）くんは笑いながら言った。

恋愛感情を知らない子供。

その言葉に、私は同意というより同調してしまった。
私も、きっと恋愛感情を知らない子供だから。
なんだか、雲取くんと私は似ている気がした。

「……私も、恋愛感情を知らない」

だから私も、自分の気持ちを言葉として吐き出した。

「……似てるね、俺たちつて」

雲取くんが私の考えていることをまるで見通しているかのようにな
言つてくれたとき、私は少し嬉しかった。

仲間がいる」とに対して、ちょっと嬉しくなつた。

「おーい、リンゴ剥いてきたよー」

「お粥もこの通り完璧なものを作ってきたぞ」

突然、何の前触れも無くドアが開かれ莉亞（りあ）^{かわのじゅ}と川苔一くんの一人がズカズカと部屋に入ってきた。別に驚く理由は無いのだが、いきなり一人が部屋に入ってきたためか私は反射的にビクリッと体を硬直させてしまった。

「いやー、川苔の馬鹿がさ『お粥つて米使うつけ?』って突然馬

鹿な発言してくるから笑つちやつたよワラワラ

「な！？ それだつたら月夜見（つくよみ）だつてリングゴを剥くとき失敗して芯しか残らなくて結局全部三花（みつか）ちゃんにまかせてたじやねーかよゲラゲラ」

「なんだとー！？ 笑つてんじやねーぞ！？」

「お前が先に笑つたんだろうが！？」

部屋に入つて来るなり莉亜と川苔くんは再び喧嘩を始めてしまつた。またリングゴを食べられたら迷惑なので私は二人から奪い取るようリングゴが乗つた皿とお粥を掴んでは雲取くんに渡した。

「ありがと」

「どういたしまして」

雲取くんの屈託のない笑顔に、私は屈託のない笑顔で返事をした。

「それにしても二人とも仲良いね」

「そう？ 私には喧嘩しているようにしか見えないけど？」

「喧嘩するほど仲が良いって言うでしょ？」

「……まさか雲取くんに言葉を教えられる日が来るとは思わなかつたよ。

雲取くんは「日頃のお礼だよ」と言しながら笑つた。その笑い声を聞きながら私は莉亜と川苔くんの口喧嘩を遠くから眺めた。

赤の他人から見ればただ仲が悪いように聞こえるが、やはり仲の良い私から見ても仲が悪いようにしか見えなかつた。

「食べる？」

雲取くんはそう言いながら私にリングゴが乗つた皿を向けた。私は

勿論遠慮したのだが雲取くんが「いいからいいから」と無駄に勧めてくるので仕方なく一つだけ貰うことになった。

「美味しい？」
「美味しい」

雲取くんの質問に私は雲取くんの言葉を引用し、『はてなマーク』を抜いて自分でアレンジして返事をした。
そのとき食べたリングポの味は、甘く、口の上でとろけやつだつた。

その後、莉亞と川音くんは口喧嘩に疲れたのか静かになっていた。まるで喧嘩などしていなかつたかのように大人しかつたのである意味不気味さを覚えた。

「そういうえば一人っきりで何してたの？」

莉亞が何の脈絡も無くそう言った。

「特に何もしていないけど？」

「うつそだー、年頃の異性が一人きりなんだからエロエロイベントぐらーには起きてるでしょー？」

私は真実ありのままを答えたが、莉亞は「ほのこの一」と肘で私の体を突きながら失礼なことを言い始めた。いくら雲取くんでも私のような可愛くない女の子には興味が無いだろう。

「……お、雲取？ もしかしてやつたのか？」
「や、やつてないつて！」

川苔くんが雲取くんを睨みながら質問……とこつより尋問していた。雲取くんが真剣な眼差しで答えたのが効いたのか「ま、お前にはそんな度胸もねえよな」と納得して穏やかな眼に戻った。

「んじゃあ、何話してたの?」

莉亞は興味心身に聞いてきた。別にそんな面白こととは話してないんだけどなー……。

「俺と赤久奈（あかぐな）さんって似てるよねーって話してたよ
「雲取くんそれは失礼だよ」
「おう、それは赤久奈さんに對して失礼だ。万死に値する
「そこまで言つー？　どうより俺と似ているつてそこまで不名
誉なの！？」

雲取くんが言つた瞬間、莉亞と川苔くんは一斉に黙倒した。
……似てるのは事実なんだけどなー。

第3話？『訪問』赤久奈奈乃香視点

「あ、そろそろ帰らないと」

突然、莉亞（りあ）が携帯電話を開いて呴いた。私も釣られて携帯電話を開いて時刻を確認すると、もつそろそろ晩御飯の時間になりかけていた。

「それじゃ、この辺で解散にしましょっか」

私がそう言いつと、莉亞と川苔（かわのり）くんも「うん」と頷いてから一斉に立ち上がった。

「今日はありがとうね」

雲取（くもとじ）くんは私たちを見上げながら言った。

「別に暇だつたからいいよ」

「早く治して学校に来るんだぞー？」

川苔くんと莉亞が各自好き勝手なことを言つてから先に部屋を出て行つた。私も一人の後を追うように出て行こうとしたが、雲取くんに「ちょっと待つて」と呼び止められたので立ち止まつた。

「奈乃香（なのか）ー？ どうしたのー？」

「『めーん！ 先に行つてーー！』

声をかけてくれた莉亞にそう返事をすると、莉亞は特に理由も聞かず、「んー、分かったー」と言つてから先に出て行つてくれた。

「で、何の用なの？」

私は雲取くんと向かい合いつ形で言った。

「やつときの続き」

「やつせ……？　ああ、あの恋愛話？」

私が心当たりのある」とを適当に言ひついで、雲取くんは「そう、それ」と同意してくれた。

「赤久奈（あかぐな）さんは、もしどいかの誰かに告白されたら交際するつもりなの？」

雲取くんは、まるで私が困ると分かつていながら、まるで私を困らせるように、何の前触れも無く当然と、そして毅然とした声で言った。言つたところより囁くと言つたほうが正しいぐらいその声は澄んでいた。

勿論、私は困った。

私が先ほど「恋愛感情を知らない」と言つたにも関わらず、雲取くんはそんな質問してきた。

それは、ただたんに私の困った顔を見たいのか、それとも真剣に聞いているのか、それは雲取くん自身にしか分からないだろう。ちなみに言つておくが、私は雲取くんの質問に答えられない。もしかしたら告白されたら交際するかもしれないし、交際しないかも知れない。

その時の気分にもよるだらけ。もしかしたら顔で決めるかもしれない。

だから私は、私自身の気持ちではなく、それでも自身ありげに茶化すように言った。

「私がそんなに軽い女に見えるかしら」

「いや、見えないよ。だから確かめたくなつた」

雲取くんはまるで謝るかのよひに「『めんね』と言つて頭を下げた。私は「別にいいわよ」と言つておいた。

「呼び止めて」めんね。用事はそれだけだよ」

「そう、それじゃ、また後日学校で勉強しましょ」

「うん、その時も」指導お願ひしますよ」

私と雲取くんはお互に「『せこばー』」と言つて、そして私は今度こそ部屋を出て行つた。

「奈乃香遅い」
「『メン』『メン』」

雲取くんの家を出るなり、莉亞は退屈だと言わんばかりの表情をしながら言つた。

……確かに待たせた私も悪いけど、それでも5分ぐらいしか待たせてないんだけどなー。

「よしー もんじや、帰りましょつかー！」

莉亞はなぜか元気な声を出しながら叫んだ。

「まあ残念なことに、俺と月夜見（つくよみ）は帰る方向が同じだけど赤久奈さんは逆方向なんだよなー」

「はつはつは、私を送つてもいいのだぞ川苔？」

「……なんで『トイツ』と帰る方向が同じなんだよ……？」俺は赤久

奈さんと帰りたいのによ……」

川苔くんはなぜかブツブツと言いながら（内容はあまり聞き取れなかつた）莉亞のことを睨んでいた。莉亞は睨まれているにも関わらず「まあ気にすんなや」と軽く流していた。

「そんじやばいばい」

「じゃーなー赤久奈さん」

莉亞と川苔くんは手を振りながら帰り道を歩いていった。

「うん、また明日学校でねー」

だから私も手を振つてから一人とは反対方向の道を歩いていった。空はもうそろそろ沈みかけていて、赤い夕日が眩しかつた。

「今日の晩御飯は何にしようかなー？　いや、お母さんが作ってくれているかなー？」

私は『』飯のことを考えながら家に向かつて歩いていた。

「あ、ちょっとといいですかー？」

「？　はい、なんでしょうか？」

突然、前のほうから歩いてきた女性が声をかけてきたので、私は立ち止まつた。

女性の外見は金髪で最初は外国人かと思われたが、目の色が黒かつたのでおそらく金髪に染めただけの日本人なのだろうと勝手な推

測をした。

それにしてもとても綺麗な、まるでモーテルとかをやつてそうな人だなー、と思わせるぐらいこ美しかった。

「えーとー、Jの辺で雲取って名前の家があると思うんだけど知らない?」

女性は初対面にも関わらず軽い口調で話しかけてきた。まあ同世代に見えるし、私としては変に敬語で話されても微妙な気持ちになつてしまつのでむしろ女性の口調を聞いていると気が楽になつて助かつた。

「ええ、雲取くんの家ならアッチのほうですよ」

私は後ろを向いて雲取くんの家があるほうを指差した。

「……貴方、わーくんの知り合いなの?」

「“わーくん”?」

女性が突然私が聞き覚えの無い単語を言つてきたのでつい復唱してしまつたが、女性は「なんでもないわ」と急に黙り込んでしまつた。

「そんなことより教えてくれてありがと。助かったわ、この辺つて迷いやさしいのよねー」

女性は私が喋る間も『えず』にペラペラと言つたことを聞いてから、「それじゃ」と立ち去ってしまった。

「変な人だなー」

私は女性が消え去ったのを確認してから呟いてしまった。

「……もしかしたら雲取くんはああいう人が好きなのかもしれないよね」

私は先ほどの女性の外見を思い出していた。女の私でさえ惚れてしまいそうな顔立ちだった。私は地味な顔立ちのため、とても羨ましかつた。

「……私も可愛くなるように努力したほうがいいのかなー…………？」

私は夕日に向かって、ボソッと呟いた。

第3話　『訪問』　???:視点

あたしは先ほど綺麗な黒髪を持つた女性に教えられた家に辿り着いていた。

家名を確認してみたが、確かに「雲取家」と書かれてあった。

「ここがわーくんの家……」

あたしは確かめるかのように呟いた。

わーくん……雲取は果たしてあたしのことを覚えているんだろうか？

あたしの心の中はそれだけで一杯だった。

もしかしたらあたしだって気付いてくれないかもしない。

いや、気付いてくれないだろう。

あたしはそう確信してしまった。

あたしは数年前と比べたら髪の毛も染めてるし体も痩せた。この間中学生時代の女の子の友達に久しぶりに会ったときには「うわー、気付かなかつたよ」と驚かれてしました。最初は冗談の類だと思っていたが、遠慮がちだったところを見ると本当にあたしだと気が付いてくれなかつたようだ。その時は少しショックだった。

あたしは勇氣を出してインター ホンを押そつとしたが、途中で止めた。

確かにわーくんと会いたかった。だけどそれ以上に「え？ 誰お前？」と言われるかもしれないという不安があたしのことを襲ってきた。

そして結局、あたしはわーくんと再会することを諦めた。

どうやらあたしには、幼馴染と出会つ程度の勇気さえ無かつたよ

うだ。

“あの仕事”をしてからは自分にちょっと自身が持っていたが、結局何も変わつていなかつたようだ。

唯一変わつたのは外見だけだ。

「……はは、駄目だなーあたし

あたしは自虐的に笑つた。虚しくなつてきた。

……なんで黒髪の女性に話しかける勇氣はあるのに、幼馴染のわーくんに話しかける勇氣は無いのだろうか？と思つてしまつた。そしてあたしは予め用意しておいた手紙をポストの中に入れておいた。

「わーくんだったら気付いてくれるよね、だつてわーくんとは昔から一緒に遊んでたもん」

あたしはわーくんのことを心の底から信じていた。
そして、あたしはわーくんの家に入らず、そのまま帰ることに決めた。

「そういうえば、さつき話しかけた黒髪の人……綺麗だつたなー」

私は先ほどの黒髪の女性の外見を思い出していた。女の私でさえ羨ましいと思える細さに私が持つていらない美しさを有していた。

「もしわーくんがあの人と知り合いだつたら、わーくんはあの人には告白しているんだろうなー」

私は「悔しいなー」と呟きながら、家に向かつて歩いていった。

間章　『数年前の公園で』　二人称視点

それは数年前の出来事。

山多摩（やまたま）公園と呼ばれる市民の触れ合いの場でもあり子供たちに入気の遊び場に、小学生の男の子と女の子がいた。

男の子は帽子を深く被り、自分の顔を誰にも見せまいと必死になつていた。

女の子は眼鏡を着用しており、男の子の横に並ぶように座つており、長い茶髪の髪が風によつて靡いていた。

男の子の名前は雲取亘（くもとりわたる）。顔にコンプレックスがある年頃だ。

女の子の名前は日向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）。視力が悪いのが気になる年頃だ。

「……なんでこんな顔に生まれてきちゃったんだろう？」

雲取が急に呟いた。

「もっと普通の顔が欲しかつた。歩く人の大半が俺の顔を見てくる。それが怖くてたまらないよ……」

雲取は肩を震わせながら言った。

「他人は毎日のように『良い顔だね、羨ましい』なんて言つているけどそれは褒め言葉にはならないんだよ。嫌なんだ。そうやって努力していないのに褒められるのは懲り懲りだ」

「……」

霞はそれを淡々と聞いた。そして静かに見守つていた。

「だから俺は帽子を被っている。こいつすれば他人に俺の顔を見せ
る必要が無い。これがあつてやつと俺は落ち着けるんだ」

「嘘だね」

雲取が言い終えると、霞はまるで「私は知ってるぞ」と見抜いて
いるかのように囁いた。

「そんなわけないでしょ？ 貴方は人と話すのが嫌いなだけ。だ
からいつも一人。一人きりなのよ」

「そ、そんなこと

「そんなことあるでしょ？ 何かを言い訳にしないと生きていけ
ない人間なんだから。そして自意識過剰にも程がある。少なくとも
私は貴方の顔を『良い顔』だなんて思ってない」

雲取の言葉を遮り、霞は淡々と、自分の気持ちを吐き出すように
呟いた。

そして霞は自分のポケットの中から眼鏡を取り出し、雲取の手の
平に乗つけるように渡した。

「え？ 何コレ？」

「その帽子と交換

「え！？ ちょ、待つて！？」

雲取が帽子を押さえて守るも、霞は無理矢理剥ぎ取つてそのまま
帽子を被つてしまつた。

「似合つ？」

「に、似合つから早く返して……」

「その眼鏡を着けてくれたら考える」

雲取は渋々と「なんなんだよ……？」と呟きながら霞から渡された眼鏡を着用した。不思議なことに、視界は変わらなかつた。

「これって伊達眼鏡？」

雲取の質問に、霞は「クンッと首を縦に振つた。

「どうして……？」

「コレならちょっと顔を隠すことが出来るんじゃない？」

霞の返答に、雲取は少し半信半疑になつてゐた。

「んなんで顔を隠せるわけ無いだろ？」

雲取は心の中でそつと思つてゐた。

「……本当は貴方の顔が見たかっただけ」

「え？」

「だ、だつて中々顔を見せてくれないんだもん。それに私は確かに貴方の顔を『良い顔』だとは思つてないけど、それでも貴方の顔は大好きなんだよ？」

霞は顔を赤らめながらそっぽを向いてしまつた。

霞の言葉に、雲取は少し感動した。

「……そつか、お前はこの顔が好きなんだな」

雲取は自分の頬を触りながら呟いた。

「……なあ、しの眼鏡貰つていいか？ 代わりにその帽子はあげるから」

「え？ め、眼鏡は元々あげるつもりで買つてきたからいいんだけど……しの帽子貰つちゃつていいの？ 高かつたんじゃなかつたの？」

「いいよ、物々交換だ」

雲取がそう言つと、霞は赤かつた顔をさらに赤くしていった。

「ありがとーー。 “わーくん”ーー。」

霞は満面の笑みを見せながら雲取にお礼の言葉を言つた。
これは、数年前の話。
数年前の、とある男の子と女の子の話……。

第4話？『再会』 雲取亘視点

赤久奈（あかぐな）さんたちがお見舞いに来てくれた次の日。俺こと雲取亘（くもとりわたる）の体調は万全となつており、学校に通つても問題無さそうだった。

「お兄ちゃん！ 朝だよー！」

俺がゆつくりと布団から抜け出そうとしたとき、俺の妹でもあり三女の雲取一芽（ふため）が騒々しい声を出しながら部屋に乱入してきた。

「……一芽よ、病み上がりの人間にその耳に響く声は止めてくれ。
結構辛い」

「んー？ 分かったよお兄ちゃん！」

俺が少し注意するも、一芽はまつたく理解してない顔をしながら部屋を出て行った。

嵐のよひとほのじだらう。

「あ、起きたんだ」

俺が今度こそ布団から抜け出そうとするが、続いて俺の妹でもあり四女の雲取三花（みつか）が静かに部屋に入ってきた。

「体調は大丈夫？ 今日も念のため学校休んでおく？」

「大丈夫、もうピンピンだよ」

俺は妹の心配を払拭するよひと布団から抜き出でてはピンチと背筋

を伸ばし大丈夫だと体でアピールした。

「よかつた、お兄ちゃんが元気になつて」

三花は「ホッ」と声を漏らしながら胸を撫でていた。

「……心配かけて悪かつたよ、看病ありがとな」

俺は三花の頭を撫でてやつた。すると三花は見る見るうちに顔を赤らめてしまった。

「あ、おい。大丈夫か？ もしかして俺の風邪が移ったのかな？」

俺は急に顔を赤らめてしまった三花に驚いてしまった。一応熱があるかを確かめるため俺のおでこを三花のおでこにくつ付けた。

「ツ！？」

俺がおでこをくつ付けた瞬間、三花はさらに顔を真っ赤にさせてしまった。だけど顔の赤さに反比例しているかのように熱は全く感じなかつた。

「おかしいな、一体どうして赤いんだ？」

俺は仕方なくおでこを離して考え始めた。馬鹿なためかまったく理由が思いつかない。

「だ、大丈夫だよ……」

「大丈夫つて……そんなに顔を赤らめて何言つてんだよ」

俺は三花を落ち着かせるために頬を触つてやろうと思いつい手を伸ばした。だが俺の右腕は三花の平手によりパシッと乾いた音を立てながら弾かれてしまった。

「べ、別に風邪とかじやないんだからーーー。」

三花はなぜか叫びながら部屋を物凄い速さで出て行ってしまった。
「……いつたいなんなんだ？」

俺は三花のことを考え、そして俺の頭では解決できないといつひと悟つてしまい、仕方がないので寝巻きを脱ぎ制服に着替えることに決めた。

何日ぶりかの制服は、少し懐かしく思えた。

制服に着替えた俺は階段を降りて台所に向かつて歩いていた。

「おはよ、兄さん

「おう、お早う一枝（かずえ）」

俺は台所のほうで味噌汁を注いでいた俺の妹でもあり次女の雲取一枝に挨拶されたため、丁寧に返事をしておいた。

「四葉（よつば）（よつみ）姉さんは？」

「先に出かけたよ。今日も遅くなるって

「そつか、分かったよ」

俺は一枝とちよつとだけ会話をして、近くにあった椅子に座った。

「ああ、兄さん。後も少しどうして朝ごはんの準備が終わるか」「芽と三花を呼んでくれない?」

「ええ、俺今座つたばつかなんだけど……」

「どうせ暇でしょ? 私は暇じやないから」「どうせ暇でしょ? 私は暇じやないから

俺は渋々と「分かったよ」と返事をしてから椅子を立ち上がり一芽と三花を呼びに行つた。背後で一枝が「まるで新婚さんみたいだなー」と少し怖いことを呟いていた気がするが、気のせいだらう。ところがつづきのせいであつて欲しい。

「一階こじるのか?」

俺は自分に確認するように階段を上つていった。

「おーい、一芽と三花。朝ごはんが出来るつでよー」

階段の途中で俺が上の階に向かつて叫ぶと、「はーい!」とつづ一芽の元気な声と「すぐに行くー」とつづ三花の声が聞こえてきた。

「さて、俺もそろそろ厕所に戻る

「お兄ちゃん!ー!」

「グハアアツー?」

俺が上の階に対しても背を向けた瞬間、ドンッ! と重々しい音と共に背後から“何か”がぶつかって来る感触が起きた。背後にぶつかった“何か”は俺の背筋を見事にクリーンヒットしてきて俺は「グハアア」等と呟つ情けない声を漏らしてしまつた。

そして俺の体は背後の“何か”によつて階段から足を離され、そのまま顔面から床に叩きつけられた。後もう一段が一段ぐらじ上つ

ていた状態で叩きつけられたら大怪我だつただらう。

「いやー、朝からスキンシップをしてしまったよーー！」

俺の背後から「芽の声が聞こえてきた。びりやら背後にぶつかつた“何か”的正体は「芽だつたらしい。

……俺は自分の妹のスキンシップのせいで後もう少しで亡き者になるところだつたのか、ちょっと悲しいなそれ……。

第4話？『再会』　雲取亘視点（後書き）

雲取家は長女が四葉、次女が一枝、三女が二芽、四女が三花です。間違つてません。「なんで『四』が長女なの？」と思うかも知れませんが、多分次ぎ辺りでその辺をしつかり書こうと思います。

第4話？『再会』　書取回観点

「一芽（ふため）。早くしないと学校の時間になるでしょ？」
「はーい！」

一枝（かずえ）に呼ばれたことにより一芽は元気よく台所に向かつて行つた。俺を置いていつて。

「……お兄ちゃん大丈夫？」

三花（みつか）が階段を降りながら心配そうに声をかけてくれた。だが声をかけただけでそのまま一芽に続くよつに台所に向かつてしまつた。

「……なんて不憫な子なんだ俺つて」

俺はそう呟いてから、そして台所に向かつていつた。

「いただきます」
「いただきまーす！」
「いただきます」
「……いただきます」

順に一枝、一芽、三花、俺と朝食を食べる礼儀として挨拶をした。そして各自が自分の箸を取つてご飯を食べ始めた。

今日の朝食は米に味噌汁に卵焼きとベーコンだ。卵焼きとベーコンは焼き加減が良いのかとても美味しそうに見える。

「一杯食べてね兄さん」

「おお」

一枝が突然話しかけてきたので、俺はベースコンを口に含みながら適当に返事をしておいた。

雲取一枝。雲取家の次女で高校一年生。俺の一つ年下だ。明るい茶髪の髪が印象的で、結構明るい性格の持ち主だ。

「兄さん元気なだけどうかしたの？」

「ああ、今わっせー一芽に背中を蹴られてな。まだ痛むんだ……」

一枝が心配そうに俺の顔を見てくるので、俺は背中を擦りながら返事をした。

「えー!? 私そんなことじゃないよーー!？」

一芽は先ほどの出来事を覚えていないのか、困惑した顔をしながら叫んできた。

雲取一芽。雲取家の三女で中学一年生。元気一杯の女の子だ。少し明るい黒髪をツインテールに縛つており、運動が得意な元気つ子だ。

「いや、お前さつき階段で俺を蹴ったじゃねえか……」

「だから私がお兄ちゃんにそんなことするはずないじゃん!」

一芽は本当に覚えていないのか、少し苛立つた声で叫んだ。
……苛立つたいのはいつのまづだよ。

「まあ一芽お姉ちゃんは少し忘れやすい性格だからね、その辺は仕方がないんじゃないかな?」

「まあ一芽お姉ちゃんは少し忘れやすい性格だからね、その辺は

今まで我関せずを決め付けていた三花が突然会話に混ざってきた。雲取三花。雲取家の四女で小学5年生。雲取家中では末っ子だ。日本人特有の黒髪でポニー・テールに縛っている。基本的に無口で大人しい子だ。

「ま、確かに過ぎたことはどうでもいいけどな」

俺は三花に同意するように適当に返事をしておいた。

「そういえば四葉（よつば）姉さんは先に出かけたんだよな。最近一緒に朝ごはんを食う機会がなくなってるよな」

「仕方がないんじゃないかな？ お姉ちゃんって職場では結構期待されてるらしいし」

俺が四葉姉さんことを話題になると、一枝はなぜか少しムツと顔をしかめだが、それでもちゃんと返事をしてくれた。

雲取四葉。雲取家の長女で社会人。俺と違つてかなり出来る人間だ。

外見も美しいし何をやらせても完璧にこなす、ある意味自慢の姉だ。

「これは父さんから聞いた話なのだが、父さんは姉さんが生まれたときは「この子には四葉のクローバーのように幸せになつて欲しい」という意味を込めて「四葉」っていう名前を授けたらしい。ちなみに俺のときは「あ、あー……別に適当で言いか」と軽いノリで「亘（わたる）」と名付けたらしい。その後母さんにこいつそり聞いてしまったのだがなんか男の子を生む予定は考えていなかつたらしい。無計画すぎる。

その後、妹が出来ることを知らずに長女に「四」の名を授けてしまった父さんは、一枝が生まれたときには真剣に悩んだらしい。そ

して考えた結果、「もう適当で言こや」と投げやりになつて適当に数字を当てはめて名前を付けたらしい。

「ひいづ理由で、次女なのに「一」の名が付いていたりするわけだ。」

「そういえば今朝の朝食は美味しいな。一枝が作ったんだろ?」

「そうだよ」

俺が質問すると、一枝は少し顔を赤らめながら返事をしてくれた。

「やつぱり一枝の『』飯は美味しいな

「本当?」

「ああ、美味いぞ」

「昨日の『』飯は?」

「美味しかった」

「明日の『』飯は?」

「美味しそうだ」

「結婚する?」

「それは美味し

しねえよ!？」

一枝が急に「結婚する?」だなんて変な質問をしてきたので俺は大きな声で突っ込みを入れてしまつた。後もつ少しで俺は今の返事に「それは美味しそうだ」と言つてしまつところだった。なんだよ「結婚する?」の返事に「それは美味しそうだ」って……相槌が話題に掠つてねえよ。そもそも結婚とかいきなりぶつ飛んだことを言う一枝も変だけどあ……。

第4話？『再会』書取回観点

「一枝（かずえ）お姉ちゃん！ 結婚するとか変なこと言わないでよ！」

三花（みつか）が一枝に向かつて怒鳴つてくれた。
そうだ、言つてくれ三花。『兄妹で結婚できるわけ無い』でしょ？」
とか言つてくれ。

「お兄ちゃんと結婚するのは私だよ……！」

な、なんだつてー！？

俺は三花の発言に驚いて箸で掴んでいた味噌汁の具を床に落としました。

あの冷静な妹までもが『結婚』とか突拍子も無いことを言つたもんだから俺は平常心を保つだけでも精一杯だ。

「えー？ お兄ちゃんは私と結婚するんじゃないのー？」

会話に割り込む形で一芽（ふため）も突拍子も無いことを発言した。

そして俺はとうとう平常心を保てなくなり左手で掴んでいたご飯の茶碗を床に落としました。幸いにも床にはカーペットを敷いていたため茶碗が割れることは無かつた。

「一人とも落ち着きなよ。三花と一芽は兄さんと結婚できないわ。だって一人が兄さんと結婚したら兄さんには『口利口』という不名誉なレッテルを貼られる」とになるんだもん」

「一枝と結婚しても『システム』といつ不名誉なレッテルを貼られるよ。」

「それに兄さんは私のような巨乳が大好きだもん、ねー兄さん」

一枝はわざとらしく両腕を組んで胸を強調してきた。

確かに一枝の胸は居乳とまではいかなくとも普通の女子高生に比べたら大きいほうだ。兄の俺でさえ触つてみたくなるぐらいいや何を考えているんだ俺は平常心平常心……。

「兄さんだつたら触つてもいいんだよ?」

一枝は上田遣いで「ながらを見ながらさらに胸を強調させてきた。

「い、いや……別に触りたくないし」

だがそこはやつぱり血の通った家族。間違つても過ちを犯してはいけない。

「そ、そんな!? 兄さんは私のことが嫌いになつたの…?」「い、いや嫌いじゃないぞ! むしろ大好きだー!」

一枝が急に泣き始めてしまつたのでとりあえず慰めた。

「ほ、本当に大好き?」

「ああ、大好きだ」

「愛してる?」

「あ、愛してる愛してる」

「結婚する?」

「結婚す しねえよ危ないなつー?」

後もう少しで取り返しのつかない」と言ひてしまつといひだつた。まあ結婚は冗談なんだけれど。

「お兄ちゃん…」の題

「ねえ、愛してる愛してる」

それ以上は、結婚してくれば、夫婦の間で、

「芽もいきなり変な」とを言つてきた。とりあえず叱つておいた。

「……お兄ちゃん？」

「なんた三花」

卷之三

「だからしねえって言つてんだろうがああああああああああああ

1

俺の怒鳴りは、まるで山彦のように響いた。

その後、近所の榧ノ木（かやのき）やんから「ひぬせい」です静か
こしてくださー」と怒られてしまつよ。

一応言っておくが、俺はまだ警察のお世話にはなりたくない。

「それじゃ行つてきまーす！」

一行つてくるね
— 梨姉さん、お兄ちゃん」

朝食を食べ終えて数分後、一芽と三花は玄関で行つてきますの挨拶をした。

「おお、行つてらうしゃい」

「気をつけてね」

俺と一枝も一人に返事をする。そして一人は玄関の扉を開けて小学校に向かつていった。

一芽が通つている中学校の名前は西山（にしやま）中学校。三花が通つている小学校の名前は里古（さとふる）小学校。どちらも家から歩いて20分ぐらいかかる。ちなみに俺が通つている山多摩（やまたま）高校は歩いて10分もしないのでどうしても登校時間に差が出てしまう。

「あれ？ そういえば兄さん珍しいね。普段ならとっくの昔に学校に登校して先生に質問しているんじやなかつたつけ？」

「ああ、うん。樋ノ木さんに説教されいたら間に合わなくなつたよ」

俺は遠い田をしながら一枝の質問に答えた。樋ノ木さんの家はおばあちゃん一人で生活しているらしい。人の悪口はあまり言つものではないが正直に言うと結構説教が長い。今日も30分ぐらい説教されてしまった。まあ前回は1時間だったのと良くなつたほうだろう。

「あ、それじゃ今日は一緒に登校できる?」

「そうだな、久しぶりに一緒に登校するか」

俺がそう返事をすると、一枝はなぜか顔をボッと赤らめてしまった。

「やたー！ 兄さんと久しぶりに登校できるよー！」

一枝は嬉しそうに顔をニヤけさせていた。正直のことを言つてしまつとうよつとキモい。

第4話？『再会』　雲取亘視点（後書き）

一芽が通っている中学校の名前を書いていなかつたのでその辺付
け加えました

第4話？『再会』 雲取亘視点

「それじゃ、ちよっと準備をしてくるね」

一枝（かずえ）はそう言いながら洗面所に向かつて小走りした。
一枝の姿を少しだけ見送って、登校まではもうしばらく時間があ
りそうだったので俺は近くに置いてあった新聞紙のテレビ欄を確認
することに決めた。

「…………ん？」

新聞に手を伸ばそうとしたが、新聞の上に乗つかっていた封筒が
気になつてそちらを掴んでしまった。

「おーい一枝！？」の手紙なに……？

俺は封筒を見ながら一枝に質問した。

「あー、それ兄さん宛みたいだよ」

一枝はわざわざ洗面所から俺のところにせつてきててくれたのか、
いつの間にか一枝は俺の横に立っていた。

「ほら、裏を見てみて」

一枝が封筒のほうを指差してきたので、俺は言われたとおり封筒
の裏を確認してみた。確かに『雲取亘（くもとりわたる）様へ』と
書かれてあった。

「差出人は……書いてないか」

俺は一通り封筒の外見を見渡し、これ以上情報がないと確信したため封筒を開けてみた。

封筒の中には紙があつた。その紙には丸っこい女の子らしい文字が書かれてあつた。

「…………」

俺は口を閉じて手紙を読み始めた。一枝も手紙のことが気になるのか、俺の肩に顔を乗せ一緒になつて手紙を読み始めた。

お久しぶりです。

突然の手紙に驚いていると思いますが、その辺はご了承ください。あたしは貴方のことを忘れたことがあります。

貴方もあたしのことを覚えていてくれると嬉しいです。

あたしのことを覚えていたら山多摩（やまたま）公園に来てください。

覚えていない、または興味が無かつたら来なくてもいいです。

あたしは今日の午前9時まで待っています。

来てくれたら嬉しいです。

大好きな“わーくん”へ

手紙にはこう書かれてあつた。

「…………なにこれ？」

一枝は果然とそんなことを呟いていた。

「怪しいにも程があるよ。兄さん、そんな手紙早く捨てちゃいな
よ」

一枝は少し気味悪そうな顔をしながら俺に手紙を捨てるよう勧めた。
だけど、俺はこの手紙を捨てることが出来なかつた。

多分、最後まで読んでいなかつたら、俺も一枝の言つており手紙
を捨てていただろう。

だが、この手紙の最後に書かれてあつた“わーくん”が目に映つ
た瞬間、俺はこの手紙を捨てることが出来なくなつた。

俺の知る限りでは、俺のことを“わーくん”と呼ぶのは世界で“
アイツ”しかいないからだ。

「…………？ 兄さん？ どうかしたの？」

一枝は俺の様子がおかしいことに気付いたのか、心配そうに声を
かけてくれた。

「悪い、今日の俺は公園で幼少期に戻りたい気分なんだ」

俺が一枝にそう伝えると、一枝は「へ？」と間抜けな声を漏らして
いた。

「要約すると、ちょっと行つてきます」

俺は一枝にそう伝え、すぐに玄関に向かい外に出かける準備をし

た。一枝も俺が言いたいことをようやく察したのが、「ちよ、兄さん！？」と俺を止めるかのよう叫び始めた。

「兄さん！？ 学校はどうあるの！？」

「今日は創立記念日だ」

「創立記念日はまだ先だよ！？」

俺は一枝の声を無視して、玄関の扉を勢いよく開けて走り始めた。

「はあっはあっはあ…………」

俺は全速力で走り、山多摩公園に来ていた。病み上がりというのもあってかなり吐きそうな気分だった。

「おえ……水水」

俺は乾いた体を潤させるために水道に向かい蛇口を捻る。喉がカラカラな俺には水道水というあまり美味しい液体でもとても輝いて見えた。

「ふう、復活したぜ」

「そつか、それは良かつたよ

俺が水を飲み終え蛇口を閉めると、背後から突然声が聞こえてきた。

「せつかくの再会なのに吐かれたら困るからね、そんな最悪なドラマは打ち切り決定だよ

俺の背後にある人物は何がおかしいのか笑いながら言っているようだ。俺は背後にある人物を確認するために後ろを振り向いた。そこには、背中まで伸びた金髪に、頭をすっぽりと覆ってしまうぐらいの大きさを誇る帽子を被った、まるでアイドルのような女性が立っていた。

「…………隨分と変わったな」

俺は女性にそう言った。その言葉を言われた女性は少し寂しそうに、けれども話しかけられたことに喜んでいた。

「……来てくれないと思つてたよ、“わーくん”」

「来るに決まってんだろう？ 数年前の俺はお前に救われたんだからよ」

俺は、数年前に、懐かしい友達に、初めて好きになつた女の子に出会つたかのように、田の前にいる女性に對して挨拶をした。

「久しぶり、霞」

俺がそう言つと、田の前にいる女性……田向沢ノ峰霞（ひなたさわのみねかすみ）は、今度は寂しさを含ませずに、満面な笑みで喜んでいた。

第4話？『再会』書取回観点

田向沢ノ峰靈（ひなたさわのみねかすみ）。幼少時代からの付き合いで世間一般で言つと俺の幼馴染という奴だ。

最後に会つたときは髪の色が茶髪だったため今の金髪には驚いたが、おそらく“ある仕事”のために染めてしまつたのだろう。

中学生の途中から“ある仕事”的都合上、都心のほうに引っ越しためもう一度と出会つことは無いと思っていたけど今こうして俺の田の前にいた。

「どういっておられるんだ？ ここいつこいつこいつといいのか？」

だから俺は靈に対しても質問した。本来、靈はこの場所にいるべき人間ではない。

「んーとね、仕事がある程度片付いたから暇が出来たんだよ。勿論、長居は出来ないけどね」

靈はあるで俺が質問するのを知つていたかのよつてスラスラと答えた。

「それにね、最近仕事のほうも慣れたからもしかしたらまたこっちに戻つてこれるかもしれないんだー」

「へえ、そうなんだ」

俺は靈の言ったことに適当に答えたものの、少しだけ喜んでいた。

「立ち話もなんだしさ、そこベンチで座りながら話そつよ」

霞はすぐ近くに設けられていたベンチを指差し、そう言った。

「……そうだな、俺も少し話したいことがあるしな」

俺も霞の要望を了承し、一人でベンチに向かっていった。

俺は霞をベンチに座らせ、近くに設けられている自動販売機でジュースを買っていた。

「えっと……確か霞ってコーラ駄目だつたよな……」

俺は霞の嫌いなものを思い出し、そしてグレープジュースを二つ買った。

ジュースを取り出し小銭を取ろうとした瞬間、太ももから愉快な音と共に振動を感じた。

「メール……一体誰だこんな時間帯に」

俺は右手を空けてポケットの中から携帯電話を取り出しメールを確認した。差出人には『赤久奈（あかぐな）』と表記されていた。

「赤久奈さんがメールをするだなんて珍しいな、一体何の用だろう？」

俺は疑問に思いながらメールの内容を読んでみた。

『今日も学校に来てないみたいだけまだ調子悪いの？ 心配で

す（^__^）』

メールにはそう書かれてあった。

このメールによつて、今現在俺は学校をズル休みしている身だと
いうことを思い出してしまつた。

俺は少し慌てながらも赤久奈さんに返信をした。

『うん、ちょっと熱っぽい。だから心配しなくても平気』
「これで平気かな？ 送信つと」

俺は送信ボタンを押してすぐに携帯電話を閉じて小銭を取り出した。
そして小走りをしてベンチに座つている霞のところに向かつてい
つた。

「ほら、お前確かグレープジュース好きだろ？」

「うん、覚えていてくれたんだ。ありがと」

霞はペコリッと礼儀よく頭を下げてからジュースを受け取つてくれた。

ブルタブを使いジユースを開けると、少しシユワッと泡がはじける音が聞こえた。だけど俺と霞はあまり気にせずにジュースを飲んだ。

「はー……やっぱグレープジュースは美味しいね」

霞は溜息を吐きながら呟いた。

俺がコーラのまづが好きだといふことは黙つてしまつた。

「なあ、霞……最近仕事は

「

「わーくん、あのジャングルジム覚えてる?」

俺が仕事について聞こうとした瞬間、霞は俺の言葉を遮るよつて
目の前にあるジャングルジムを指差しながら言った。

「あ、ああ……覚えてるよ。よく皆で遊んでたよな

俺はとうあえず相槌をしておいた。

「うん、私はスカート穿いてたから上のほうには登つてないんだ
よねー」

霞はそう呟きながらジャングルジムの天辺を見つめている。

俺は昔、霞と他の友人たちと一緒にジャングルジムで遊んでいた
頃を思い出した。他の皆はジャングルジムを優雅に登っていたが、
俺は目立ちたくないからという理由で、霞はスカートのためパンツ
が見えるという理由で、それぞれ理由は違えどジャングルジムの天
辺に登つたことがなかつた。

「ね、せつかくだから登つてみよつよ

霞は目を輝かせながらジャングルジムの天辺を指差した。

「……いや、さすがにこの歳でジャングルジムに登るのは恥ずか
しいんだけど」

「大丈夫、誰も見てないよ

確かに、霞の言つとおり今現在公園内には人の姿どころか気配す
ら感じられなかつた。もしかしなくともこの公園内には俺たちしか
いないのかもしねない。

「いや、人目とか関係なく恥ずかしいんだけど……」

「わーくんつたらそんなこと言っちゃってー。大人になつたら登れないんだよ？ 登れるチャンスは今しかない！」

霞は親指を立てながら叫んだ。

……それでも確かに霞の言うとおり、今ここで無駄な意地を張つてジャングルジムを登んななかつたらいつか大人になつたときに後悔するかもしれないな。いや、今の俺たちは充分大人だと思うけどさ。それでも何かの記念として登つておくのも悪くないかもしれない。

第4話？『再会』書取回観点

「そうだな、せっかくだから登りておくか」

俺がそう返事をすると、霞（かすみ）は嬉しそうに笑いながら俺の右手をギュッと握つてきた。

「よし、そんじゃ行こー！」

「あ、おー。ちょっと落ち着けよ」

霞は俺の体を無理矢理引っ張つてジャングルジムへと向かつていった。

子供の頃は高くて、頂点から落ちたら死んでしまうかもしないと考えながらジャングルジムを見ていた。だけど不思議なことに、高校生の俺にとってはちょっと大きいぐらいの遊具にしか見えなかつた。実際にジャングルジムの大きさは俺の背よりちょっと高いぐらいで、「なんでこんなものが子供の頃には高く見えたのだろうか」と錯覚を覚えるぐらいだ。

「そう思えるほどに成長したことかな？」

俺はボソッと呟いた。

今俺と霞はジャングルジムの頂点に登つて座つていた。ジャングルジムそのものが高くないため、難なく登りきることができた。

「風が気持ち良いね」

「そうだな

霞の咳きこ、俺は適当に相槌をしておいた。

確かに、少し高い場所に登つただけにも関わらず透き通つてくる風は気持ち良かつた。子供の頃にこの風を体験していたらどう感じていただろうか？

「…………ねえ、わーくん」

「なんだ？」

「突然なんだけど、他の皆はどうしている？」

霞は青い空を見上げながら俺に質問してきた。おやじく『他の皆』といつのは俺たちが中学生の頃に知り合つた友人のことを示しているのだね。

「刈寄（かりよせ）は俺が通つている高校よりも良い所に行つたよ。元々頭が良かつたから。市道（いちみち）さんと今熊（いまくま）くんははちょっと遠い高校に行つた。他の奴らも適当な高校に行つてるけど丘杵（うすき）は……知つての通りだ」

「そつか。わーくんはどうに行つてるの？」

「山多摩（やまたま）高校。平凡な公立高校ですよ」

「そつか、そんじやあたしもそこに転校しようかな？」

「マジかよ」

俺が露骨に嫌そうな顔をすると、霞は「マジです」と悪巧みしていの子供のような無邪気な表情をしながら返事をしてきた。

「ねえ。山多摩高校にはどんな人がいるの？」

霞はびしうやら俺が通つてゐる山多摩高校のことが気になる年頃らしい

しき。

「やうだな……ハツキリ言つて普通の高校だ。世の中のどこのでもある平凡な高校で、漫画のよつたな面白っこともなれば小説のように感動する場面なんてひとつもない」

「今からその高校に通う人の前でそんな夢の無いことを言わないでよ」

「お前が質問してきたんだろ?」

「やうだけじー……」

俺が意地悪そうに叫つと、霞は「むむー」とホッペを膨らませながらそっぽを向いてしまつた。

「んじゅわ、友達出来た?」

ただソッポを向いていた時間は短く、すぐに機嫌を直して別の質問をしてきた。

「出来たよ。本仁(ほにた)くん(川苔(かわのり)くん)に月夜見(つきよみ)さん。それと

「どうりでさ、わーくんの知り合いで綺麗で長い黒髪を持った女性の入つている?」

霞はまたもや俺の言葉を遮つて質問してきた。こととき俺は「質問に質問を重ねるな」と突つ込むべきか、それとも「人の話は最後まで聞こづけ」と叱つておくべきか迷つたが、霞が言つた『綺麗で長い黒髪の女性』のことで頭が一杯になつてしまつたためとりあえず叱るのは後回しにした。

「綺麗で長い黒髪の女性…………? あ、俺の中では赤久奈(あかぐ

な) さんつて人がその特徴に当てはまるよ

「ふうん、赤久奈つて言つうんだ……」

霞は肘を付いて手の甲を顎に当て、少し考え始めていた。

「……わーくんつてもしかしたらその人のことが好きなんじゃないかな?」

そして霞は何の前触れも無くやつぱり言つていた。

「……なんだよ急に?」

「いいから答えて。好きなの?」

俺はいつもの冗談かと思い少し笑いながら霞のことを見たが、霞はこれまでに見たことが無いぐらいに真剣な顔だった。霞とは古い付き合いだがそんな真面目な顔で見られる日が来るとは思つてもいなかつた。それぐらいに霞は真剣だった。

「……ああ、俺はそういう恋愛感情には詳しくから分からぬいや

だから俺は自分の気持ちを正直に伝えた。

「じゃあ、あたしのことは好き?」

「ああ、勿論好きだよ」

俺は再び自分の気持ちを正直に告げた。

第4話？『再会』　雲取亘視点

「霞（かすみ）の」とは幼馴染として大好きだよ。この気持ちには嘘偽りは無い」

「でも幼馴染として好きなだけで、別に恋人にしたいほど好きなわけじゃないでしょ？」

「ああ、そうだな。お前のことは姉妹のようなものだからな。さらにおうと肉親みたいなものだな。さすがに肉親を恋人にしたいと思うほど俺は変態じゃない」

「…………そっか」

俺が笑いながら言つと、霞はなぜか悲しそうな表情をしてきた。

「というかお前、どうして赤久奈（あかぐな）さん这件事を知つてたんだ？ 知り合いで？」

「いや、この間わーくんの家の近くですれ違つただけ。多分その赤久奈さんって人は私のことを知らないと思つ」

世界は狭いと言つ人がいるけど、まさかここまで狭いとは思わなかつた。

「そうだ、俺は好きな人言つたんだからお前も好きな奴がいるんだろう？」

「…………まあ、好きな人ならいるわよ」

「だったら言つてみろよ。俺だけ言つてお前だけ言わないのは不公平だ」

俺はわざと嫌な顔をしながら霞に近づいた。すると霞は当然のことながら俺から距離を離した。ジャングルジムという不安定な場所

に乗つてこににも関わらず器用な」とをするなど思つた。

「多分だけじ言つたらわーくこの」とを苦しめると思つよ

「ん? もしかしてその好きな奴と付き合つてたりするのか?」

「ううん、ちなみにあたしはまだ男女交際の経験は無いわよ」

霞は横に顔を振つた。その瞬間、金髪に染められた髪が靡いて「あ、綺麗だな」と一瞬見惚れてしまつた。

「とにかくお前みたいな綺麗な顔立ちでも彼氏が出来ないんだな」「世の中甘くないわよ」

霞の答えに、俺は「それもそつか」と返事をしてから話を戻した。

「カツカビゲロつちまえよ。いいじゃねえか。別に減るもんじゃねえよ」

「…………本当に苦しまない?」

「そもそもどうして話を聞くだけで苦しまなきやいけないんだ?」

「じゃあ言つよ…………」

霞は「すう」と息を吸つて、心を落ち着かせていった。
そして顔を紅潮させてから、少し恥ずかしそうに言葉を言い放つた。

「わ、わーくんのことが好きなんだよ」

「…………え?」

俺は霞の言葉を聞いて、俺は間抜けな声を出しちまつた。霞の顔はこれまでにないぐらごに赤くなつており、恥ずかしさのあまり顔を背けていた。

霞の言葉は、まるで世間話をしているかのように簡潔で、それ以上ないぐらいに完結していた。たつた数文字の言葉に、俺の体全体はドッシリと何か重たいものを背負ったかのようにダルく感じた。喉の奥もまるで栓が詰められたかのように窮屈な気持ちとなり、息をする」とさえ忘れていた。

「…………嘘だろ？」

俺はたつた四文字の言葉を言った。これだけでも俺は精一杯、俺の体に残っている力を振り絞って出した言葉だ。『言葉の重み』とは良く言つたもので、霞の『わーくんのことが好きなんだよ』という言葉はそれほどに俺の体全体に重みをかけていた。

「わあ、もしかして嘘かもしれないよ」

霞は少し小悪魔っぽい雰囲気を醸し出しながら意地悪そうに返事をしてきた。

「あたしも結局はわーくんと一緒に恋愛感情を知らない子供だからね、もしかしたらあたし自身がこの気持ちを勘違いしているだけかもしれないし、そうじゃないかもしない。そんなことは本人であるあたしでさえ分からなんだから誰にも分からないよ」

でもね、と霞は少し息を吸い、言い続けた。

「わーくんが好きだという気持ちは本当だよ。その気持ちはもしかしたら友愛かもしれないし恋愛かもしれない。でも好きだつていふ気持ちは変わらない。だから勇気を振り絞って告白してみた」

「で、その感想は？」

「まだ分かりませーん」

霞は星のマークが見えるんじゃないかと錯覚をせるほど綺麗なウインクをした。何とも可愛らしかった。

「…………ようするにこの手紙はラブレターってわけね」

「そういうこと」

俺は今朝見つけた手紙をポケットの中から取り出した。適当に入れていたためか少し折れ目が付いている。

「だから、ハッキリ決めてよ」

霞は突然、真剣な眼差しを俺に向けてきた。

「わーくんが誰を好きになろうとそれはわーくんの自由。だけどその好きになる対象がもしかしたらあたしになるかもしれない。だからわーくんがあたしのことを好きなのか、それともその赤久奈さんつて人のことを好きなのかハッキリ決めて」

霞は何の躊躇いも無く言い連ねてきた。

……幼馴染と久しぶりに会つたはずなのに、なぜか大変なことになってきたぞ。

「…………別に今じゃなくてもいいわ。だけど三日後までには決めて。こっちにはこっちの事情があるから」

「…………分かった。いや、本当は突然すぎて何も分からないんだけだ……とりあえず三日後までには白黒つけるよ」

「うん、それがいいと思うよ。ちなみにあたしはいつでも良いわよ」

霞はそう言いながら、ジャングルジムから跳んで地面に着地した。

「そうだ、わーくん。その眼鏡まだ着けてたんだ」

「え？　ああ、まあな。お前もその帽子ちゃんと被つてんだな。

似合ってるぞ」

「ありがと、わーくんの眼鏡も似合つててカッコイイよ」

霞はそう言い残して、まるで逃げ去るかのように公園を出て行つた。

「……なんだか頭の悪い俺にとつてなんでもなことになつてしま
たなあ」

俺は青い空を見上げながら、誰もいない公園で一人呟いた。

霞の告白は、確実に、真正面に俺の心を苦しめる原因となつてい
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8457x/>

彼女と恋と勉強方法

2011年11月24日23時03分発行